

X10
成人向
未成年者への頒布禁止

恵みあふれる聖マリア
罪深き私をお救しくください

二十五人の作家が訪ぎ出す
ちよっぴりHな志摩子さんの物語

藤堂志摩子オンリー合同誌

白薔薇さま（ロサ・ギガンティア）と呼ばないで

2007
04

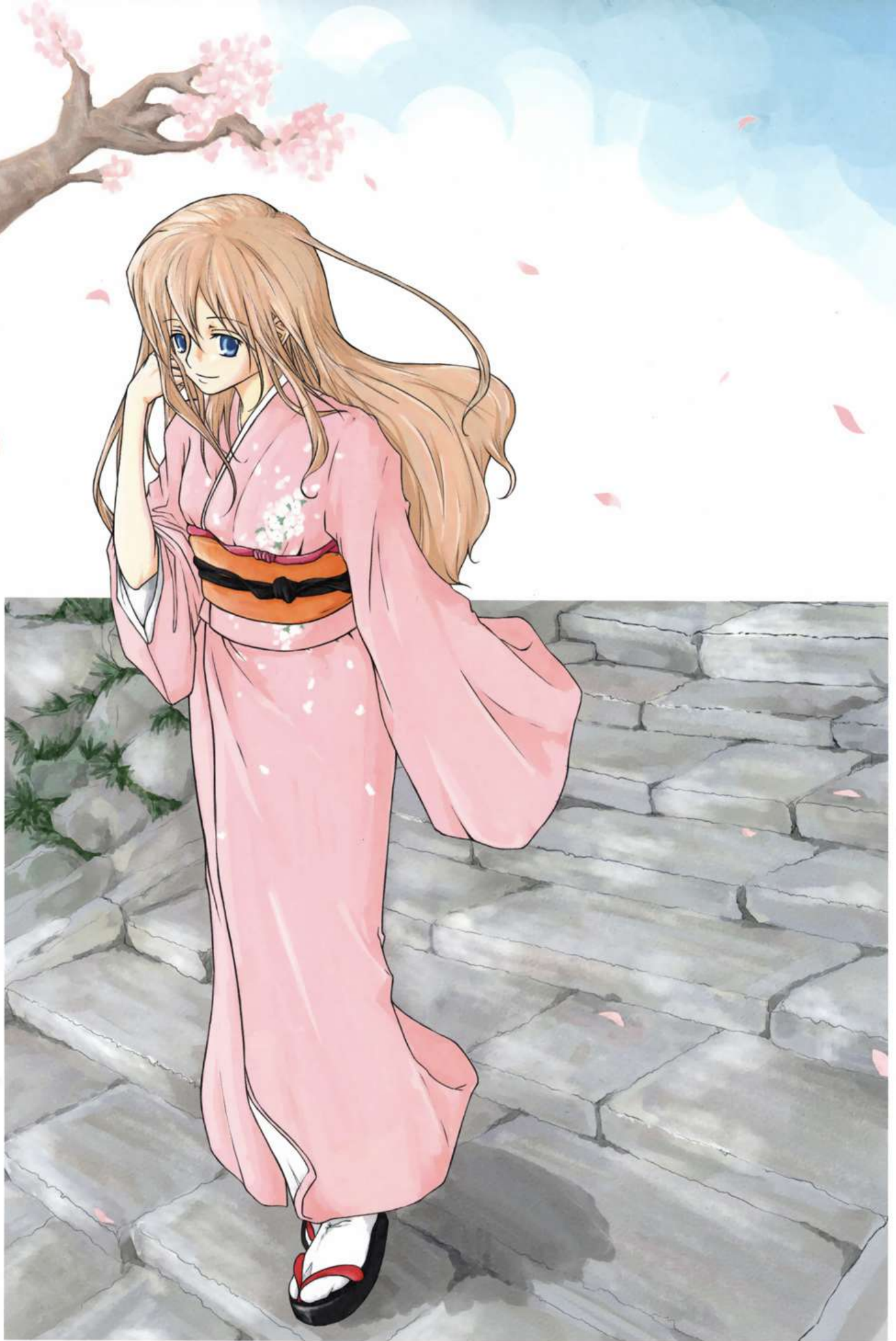
志
八
会

白薔薇さまと呼ばないで

ロサ・ギガンティア

藤堂志摩子オンリー合同誌





三月の頃



「春だねえ」

「もう、すっかり春ですわね」

「あわてん坊の志摩子さん。」











TODD'S SHIMAZUKO





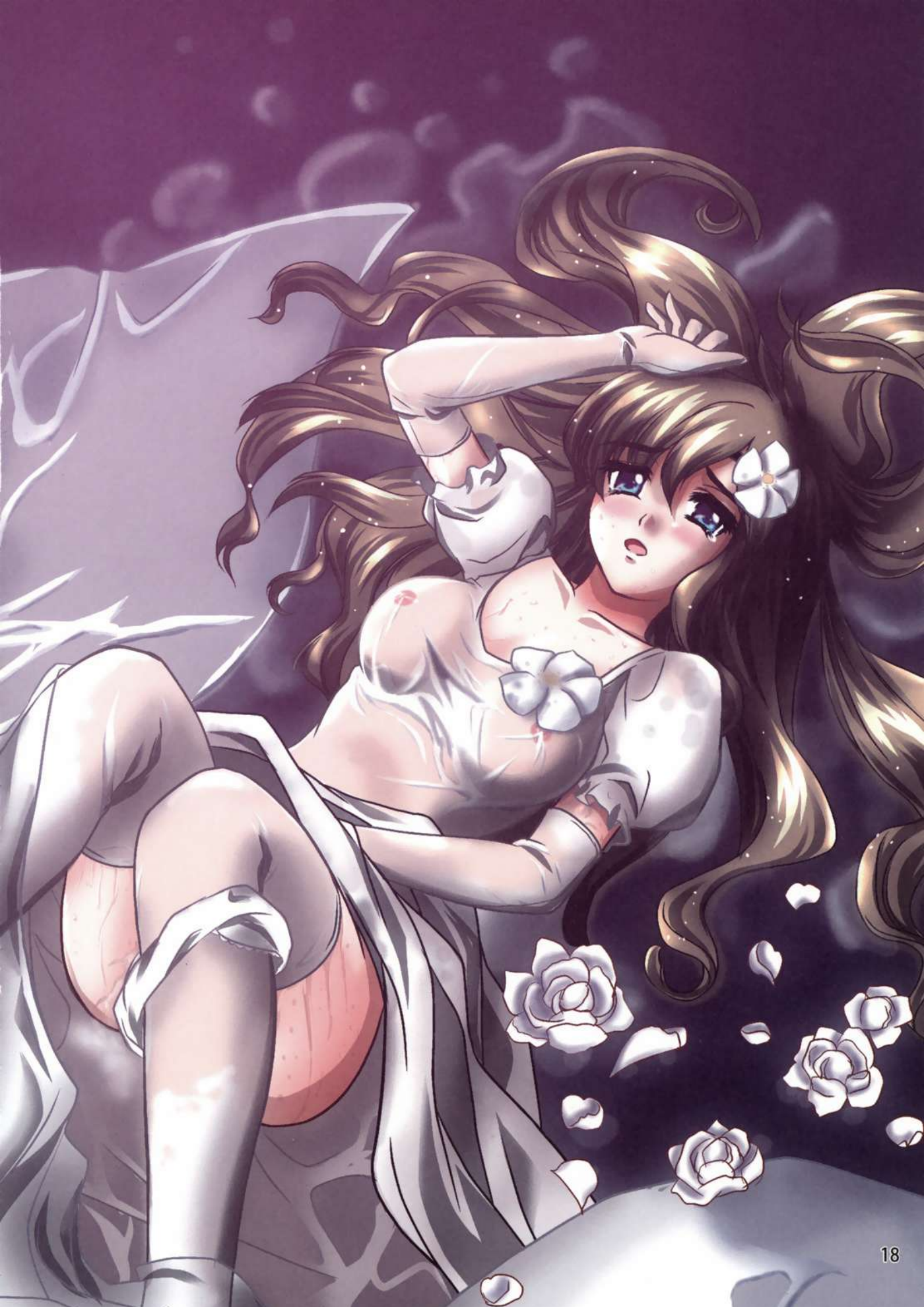














Rosa Gigantea & Rosa Gigantia en bouton





名前を呼んで

拉致成功
——
全ては



私たちが
もっと仲良
くなる為

この方法が
一番ね



さん付けの関係から
抜け出すの



…志摩子さんの
そういう所、駄目
何で起きるの



えええ?



私たちが
まだ知らないのは、
志摩子さんだけなの



ひゃあっ

ちょっ
由乃さ…
何するの!?



は…んっ
あっ…!!

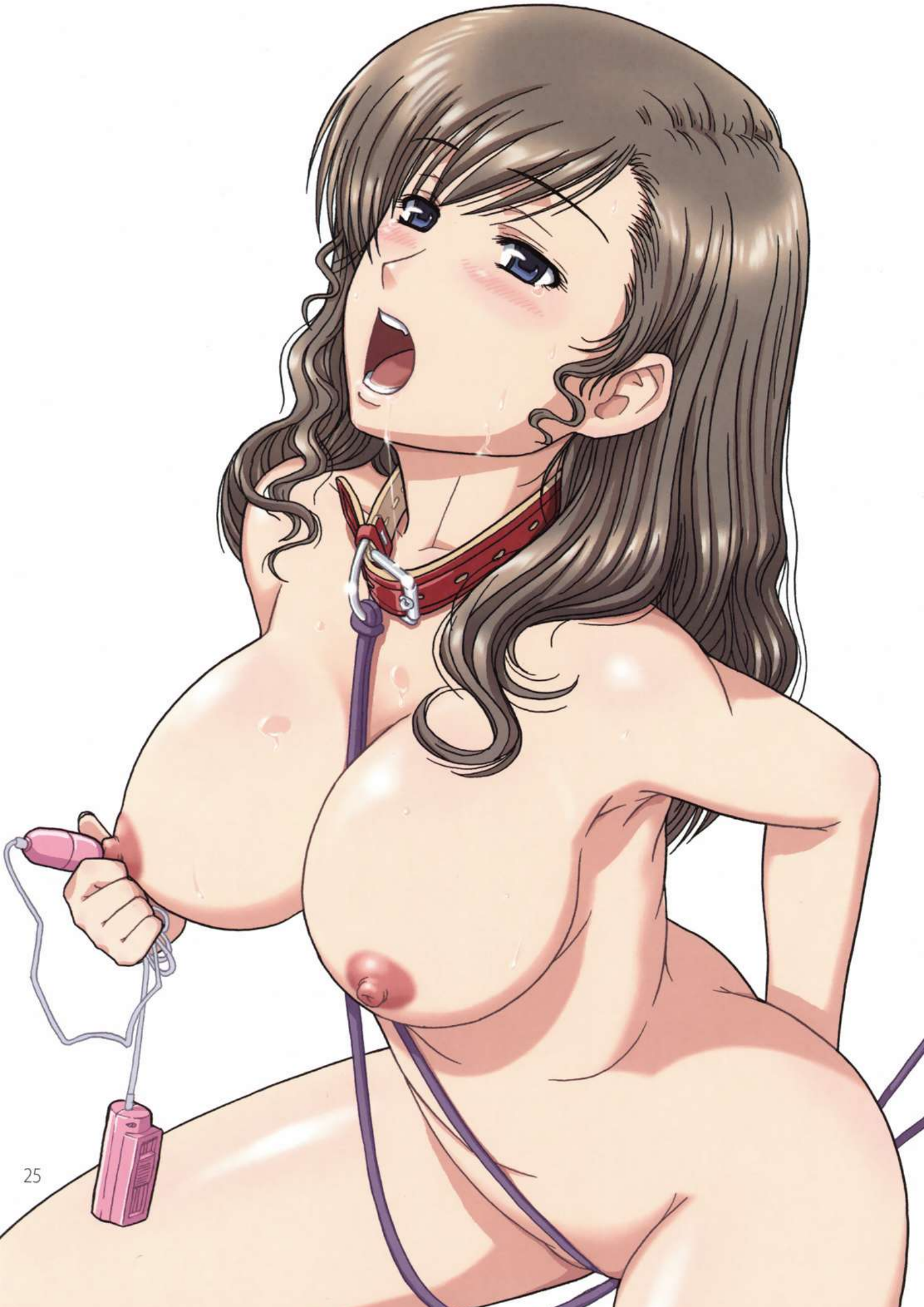
あっあああっ…



ふあっ







■ Index of Color Illustrations



Cover

3

4

5

八尋

日和皐

“春” 神谷

“花時はなごき” おおかみいぬ



6

7

8

9

しなの屋まぐろ

村矢佳久

“しまのり” 抹茶閣下。

“墮落” やみくろ



10

11

12

13

賽子

“3M志摩子さん” sinko

賽子

賽子



14

15

16

17

“濡れ透け競泳” ○わ “ウサギガンティアおしりで
イっちゃうサウサ” ○わ

“月夜のうさぎ” ちまろ

“cherry blossoms” 高梁れん



18

19

20

25

“バッドエンド” ヤマグチタカシ

“嵐” 碧城

“背徳の白薔薇” 灰猫

“Ecstasy” 碧城





「んん、可愛いな」

「うん、うん」



わ
もうこんな
時間

董子さん そろそろ
戻られるかしら

.....
ねてる...



乃梨子？



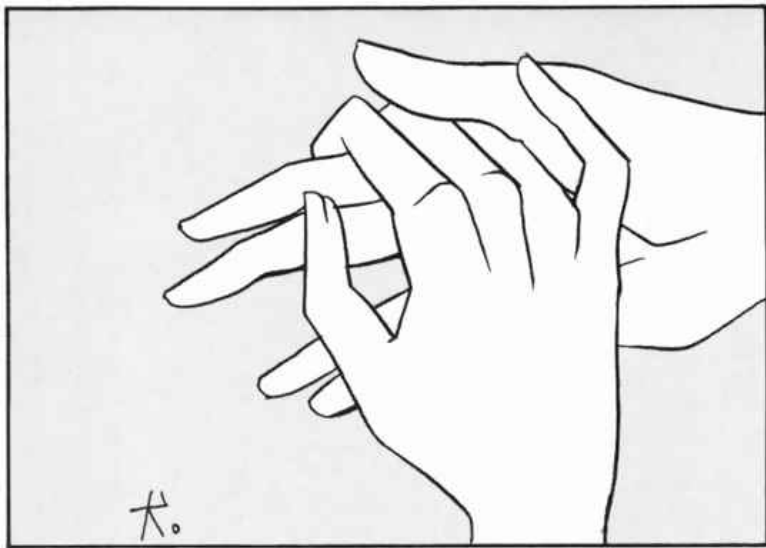
そのまま
寝ちゃったのね.....

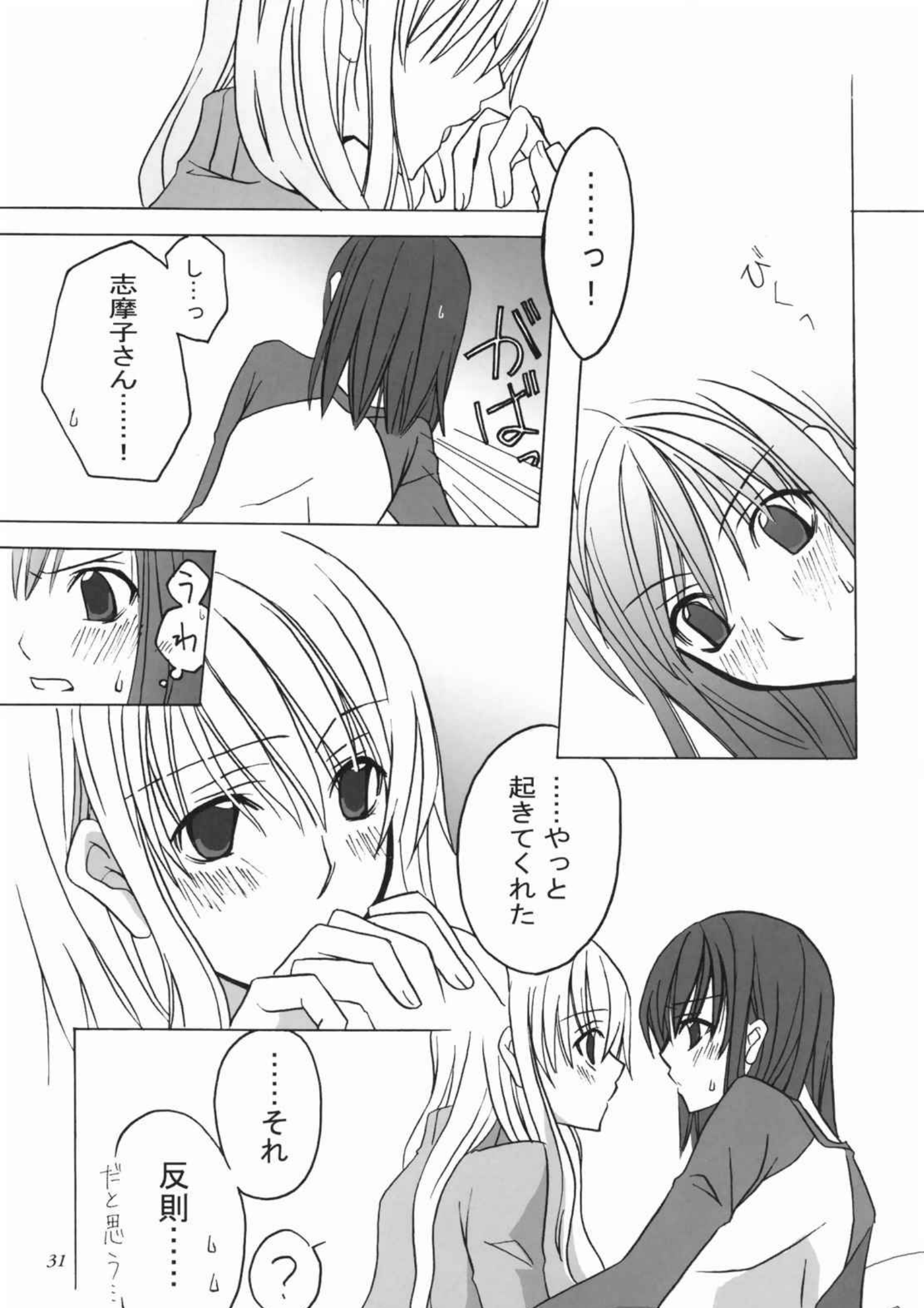


静かだぞ
思っせん



↑怖いのが





……っ！

ひん

し……っ
志摩子さん……！

か……は……

うわ

……やっと
起きてくれた

……それ

反則……
だと思っ……

？



すみません
お邪魔します

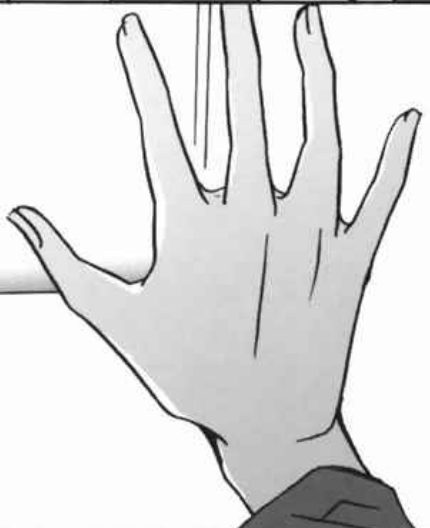
アキアキ
カキカキ

カキカキ
カキカキ

ただいまー

あれー……
お嬢様かー……

おや志摩子さん
……



なんか
最近……

妙に……



……

はあ
いつまで
もつかな……

……
お嬢様か……



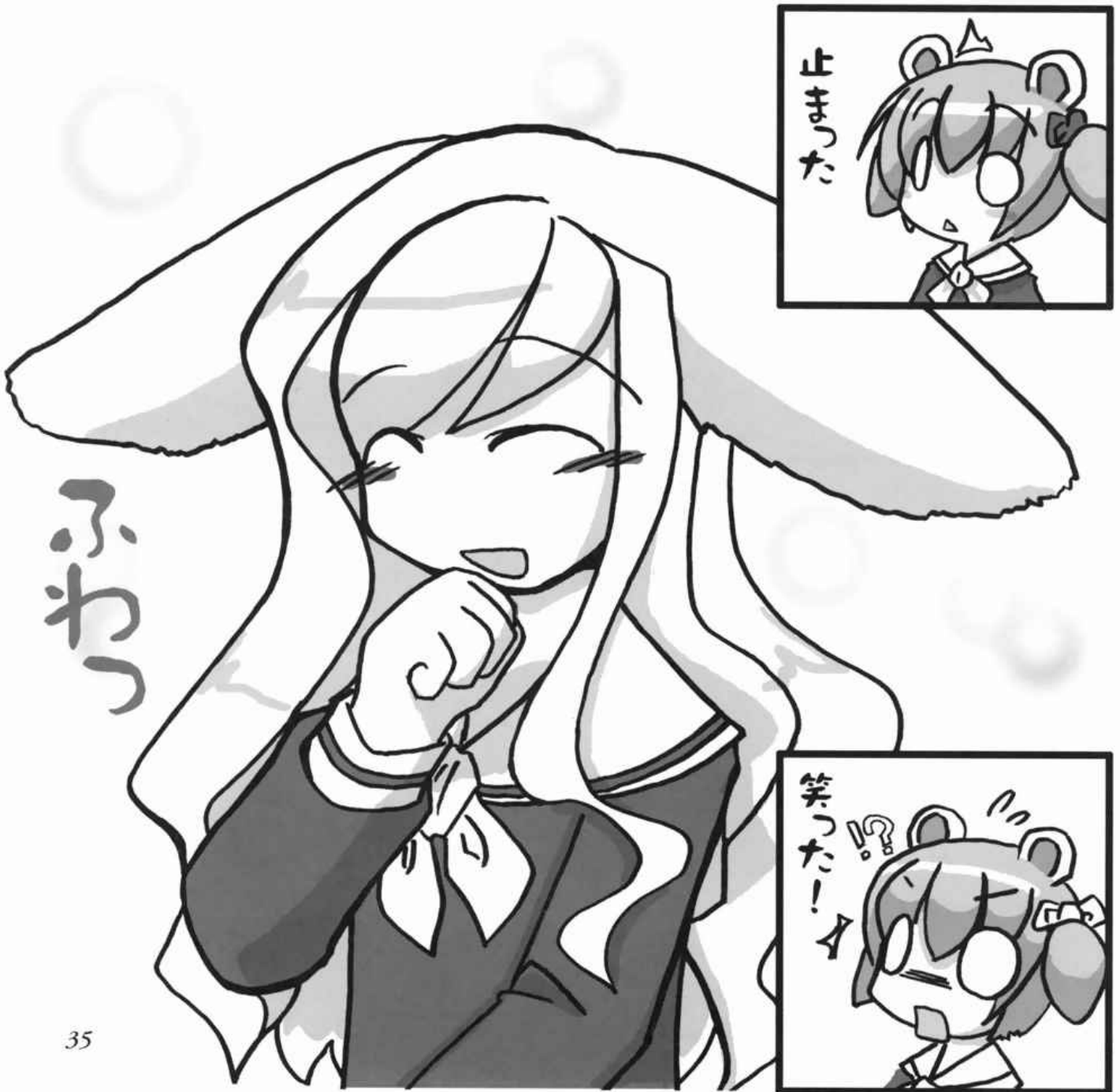
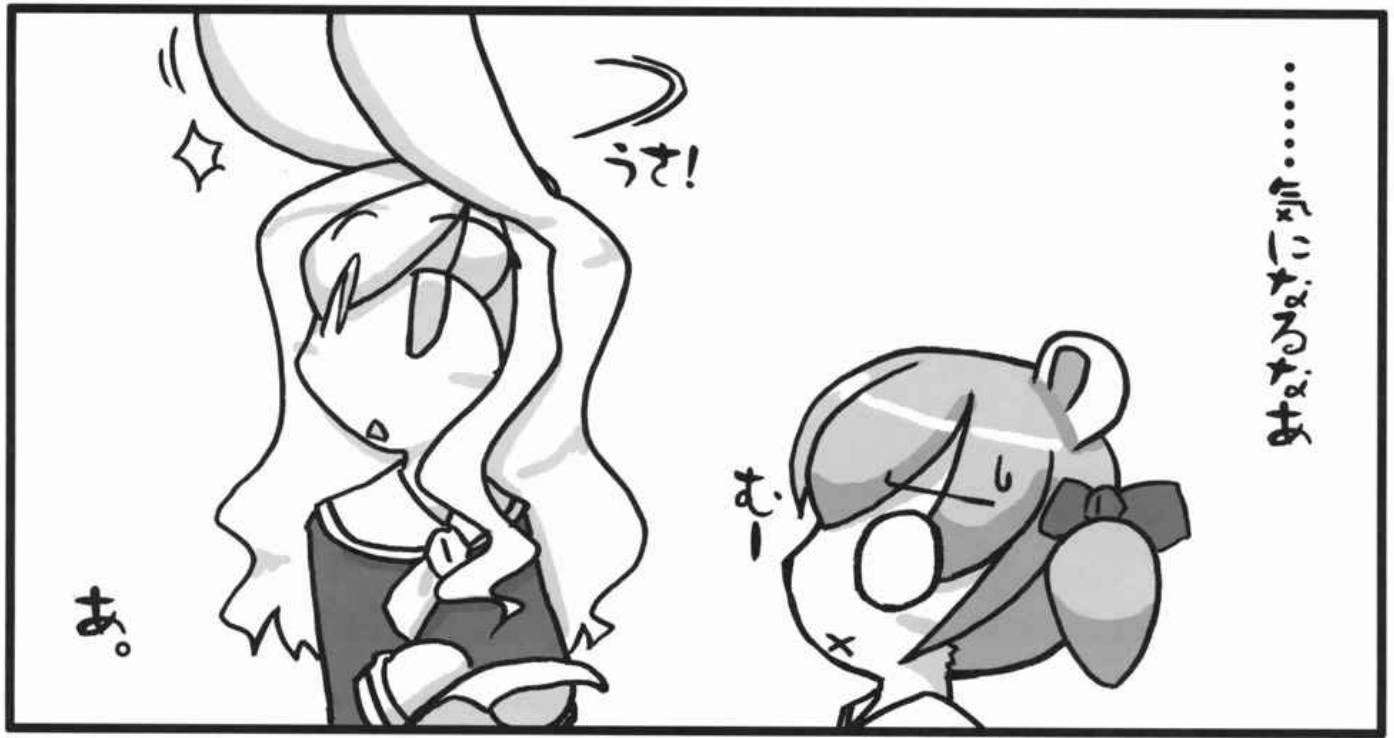
志摩子さんの

うさみみを

観察した話

おおがみいぬ









志摩子さん

え？

さわってかわって。
あいほら

あ、祐巳さん
ごきげんよう

トキトキ

丁度良かった
あのね

蓉子さまが、
作業があるから
薔薇の館に
集まってって

もう借りる物は
決まっているの

5分くらいで
行けると思う

そんなに急じゃ
なかったから
ゆっくりでいいと
思うよ

大丈夫

あ、でも本借りる
ところだったよね



志摩子さん?



くまっ
何もあんな真っ赤
にならなくてもさ

お姉さまが急に
おかしな事
なされるからです！

ごめんごめ
……っ

笑いながら言わ
ないで下さい！

しゅ
*60

ててて

もう……
早く薔薇の館に
行きましょう

遅くなり
ますよ

30い

……

そうやって5分とか
もう行こうとか

つれない事
言うからだよ

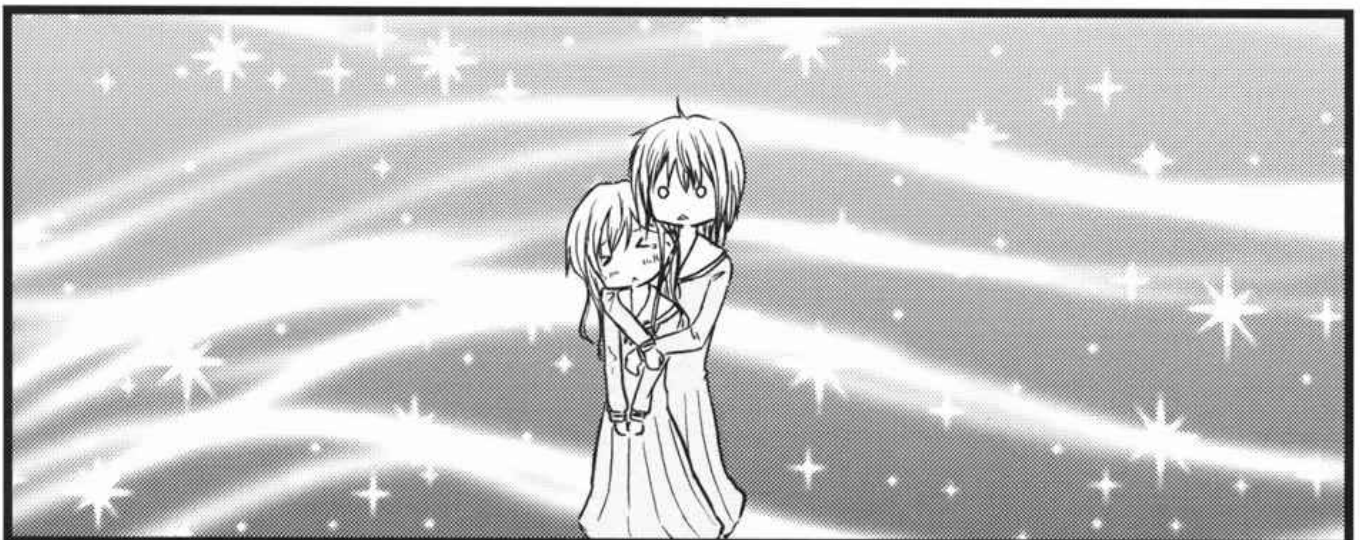
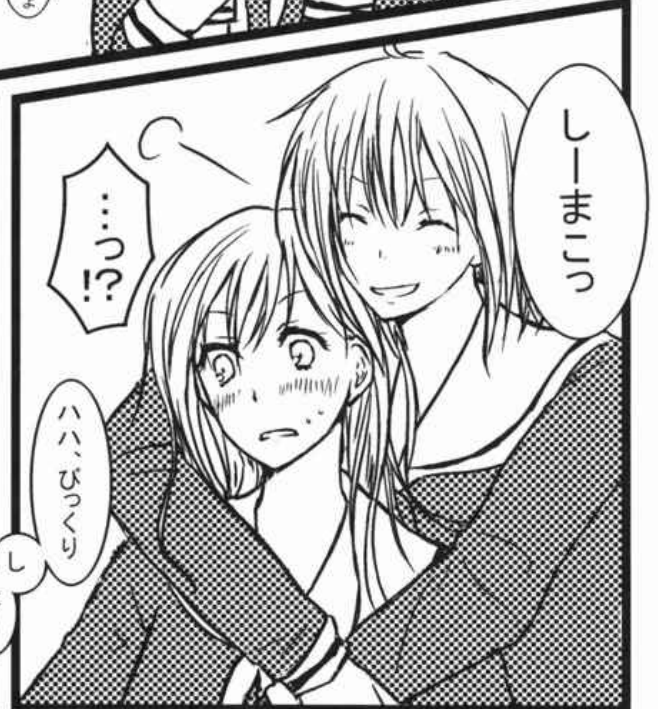
……っ！

なるほど
耳も弱いんだな

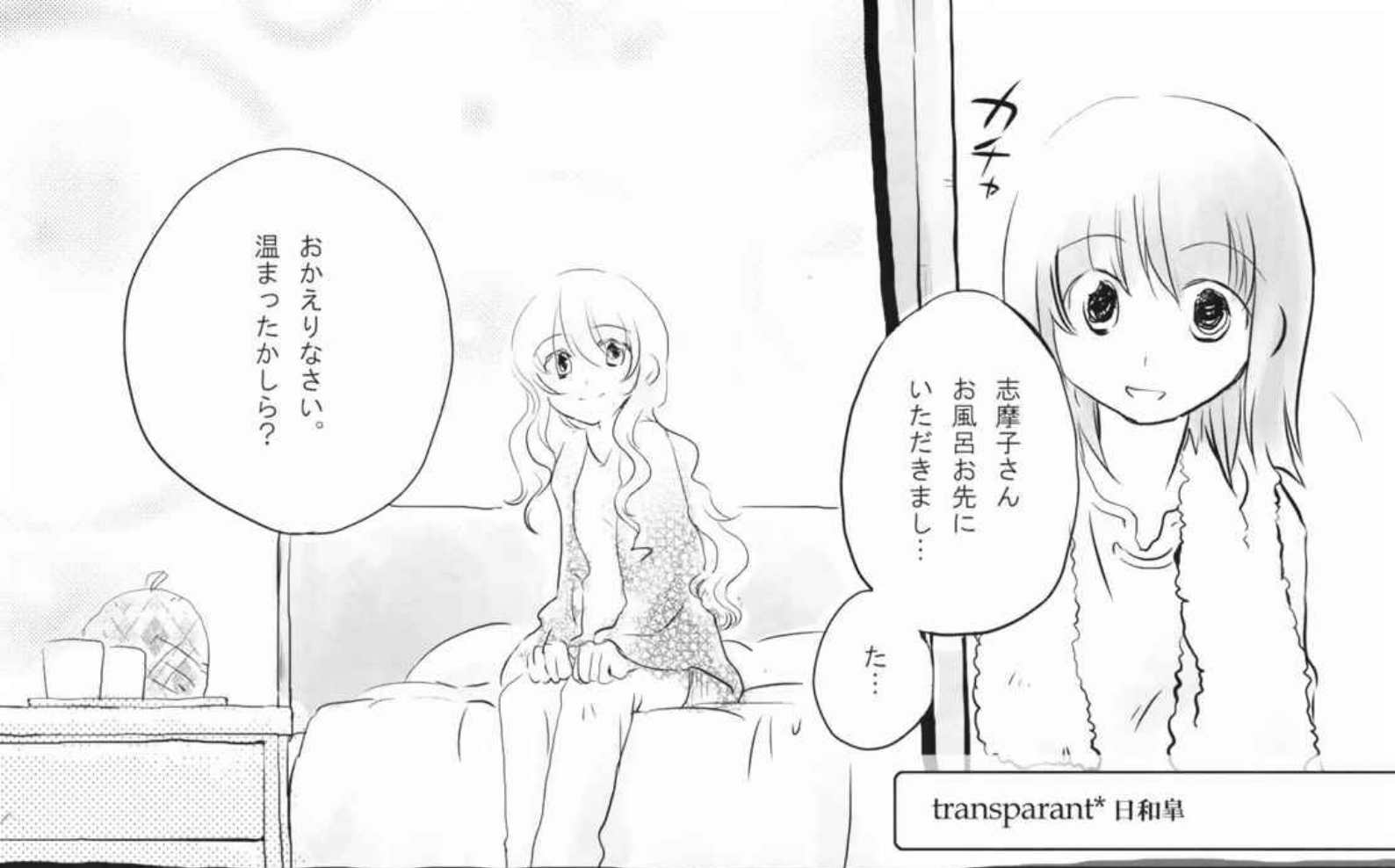
あいたたた

終









カチャ

おかえりなさい。
温まったかしら？

志摩子さん
お風呂お先に
いただきまし...

た...

transparent* 日和皐



あ、志摩子さんの
パジャマ姿って
なんだか新鮮で

そう？

?

乃梨子？

...



枕とかは気にしないんだけど
自分の家の匂い？
みたいなものが無いと
なかなか寝付けなみたい...

本当は新しいパジャマ買って
用意していたんだけど、
他所にお泊りする時は
いつもこれ着ていて。

乃梨子の
パジャマも
とっても
似合ってる

え、これ？



折角の志摩子さんのお宅だし
もうちよっときちんとした
格好したかったんだけどな



えっ



乃梨子



え、ちよ
志摩子さん…!

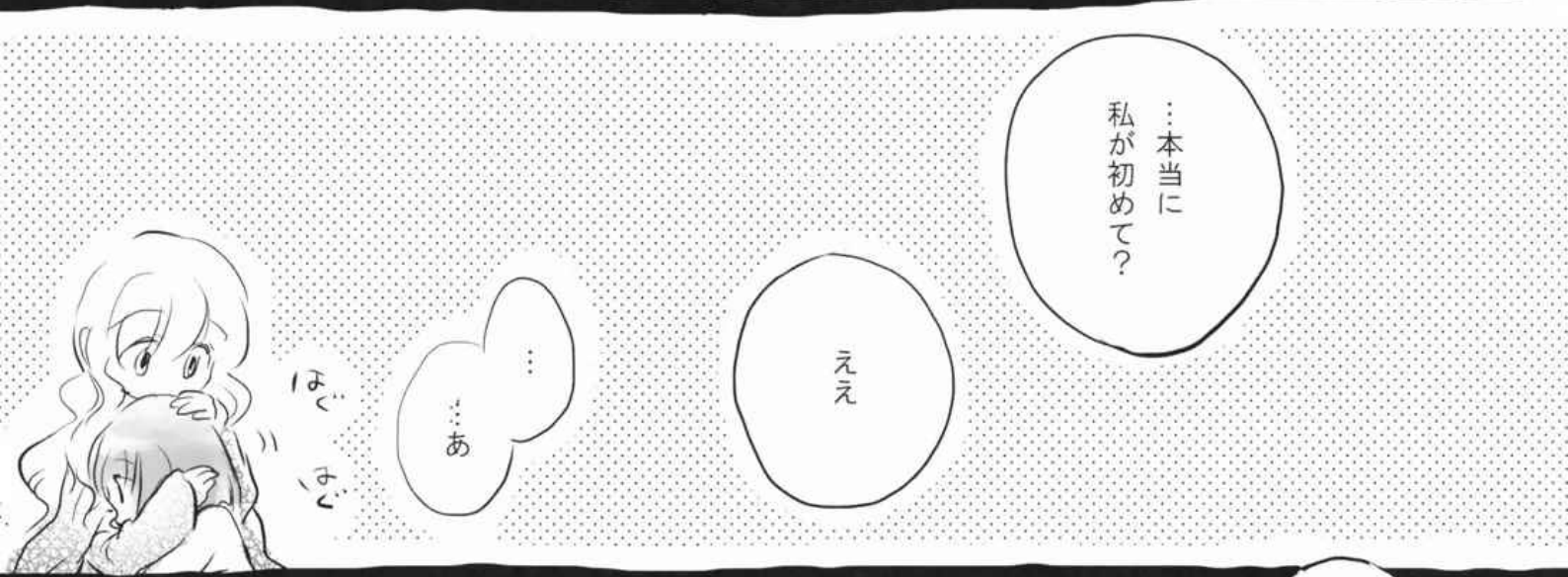
…聞いて





心臓の音

…緊張しているの
誰かと一緒に夜を過ごすのは
初めてだから。



…本当に
私が初めて？

ええ

…あ

ほど
ほど



何？

今、重なったよ

私と

志摩子さんの音



乃梨子…

え

ほら

ふか



理由ない不安も

きいて？

個の孤独も

いっしょだよ



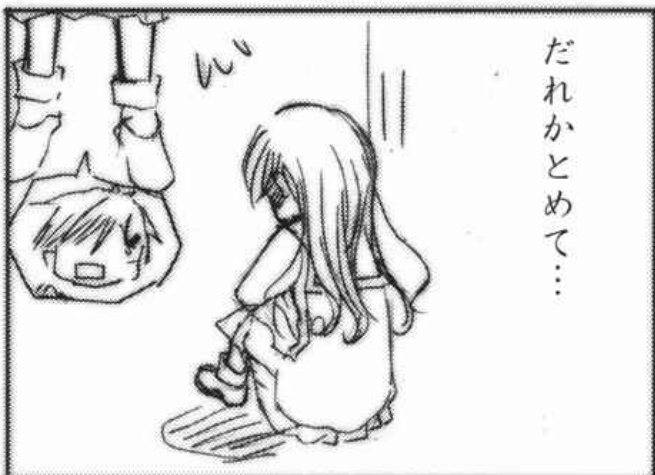
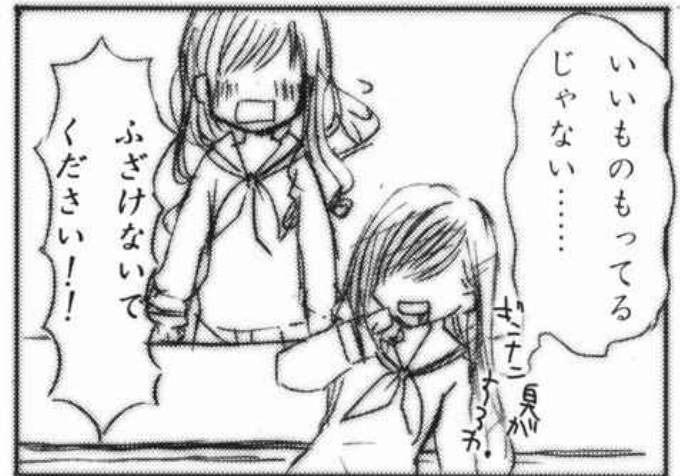
重なる心音と共に
とけて

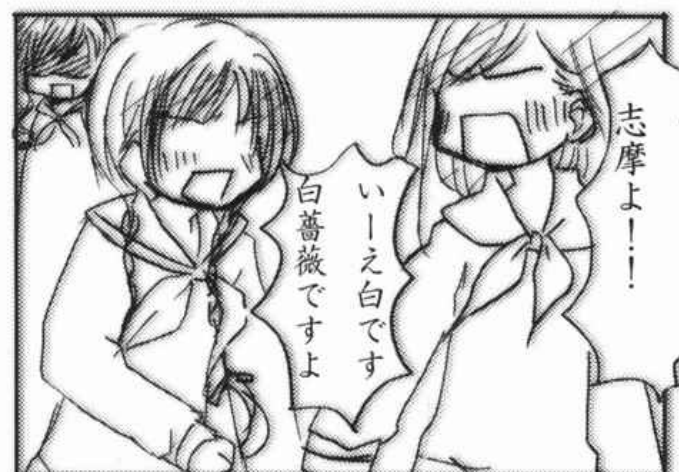
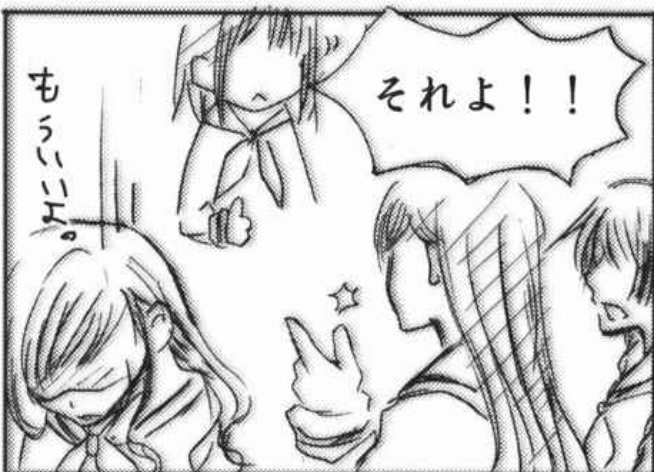
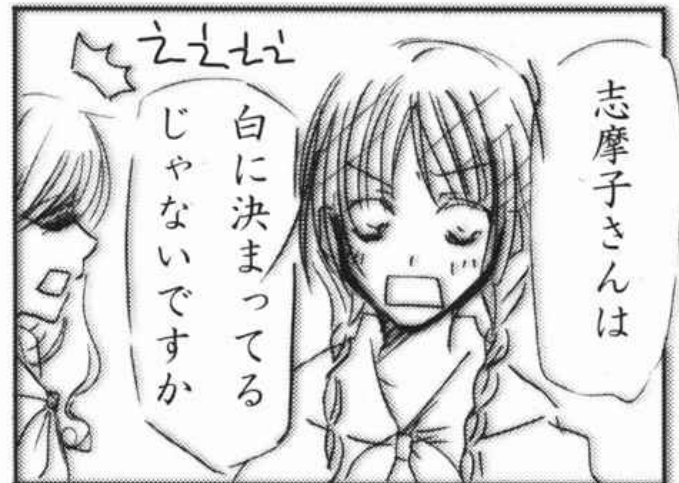
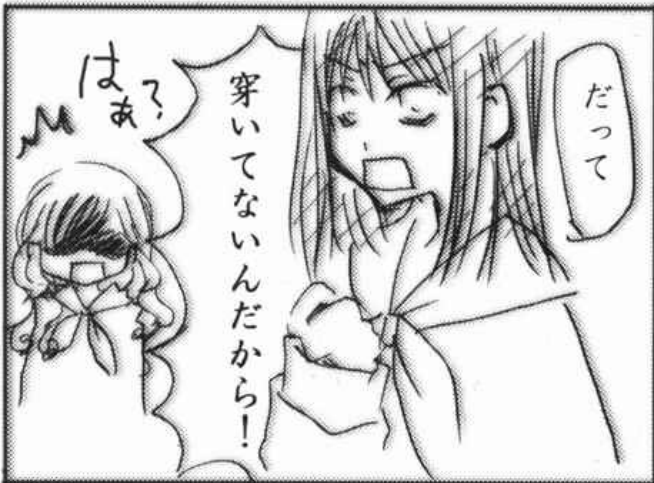
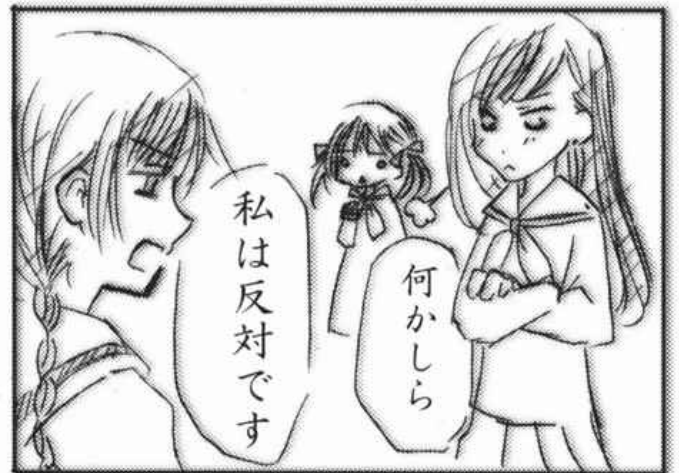
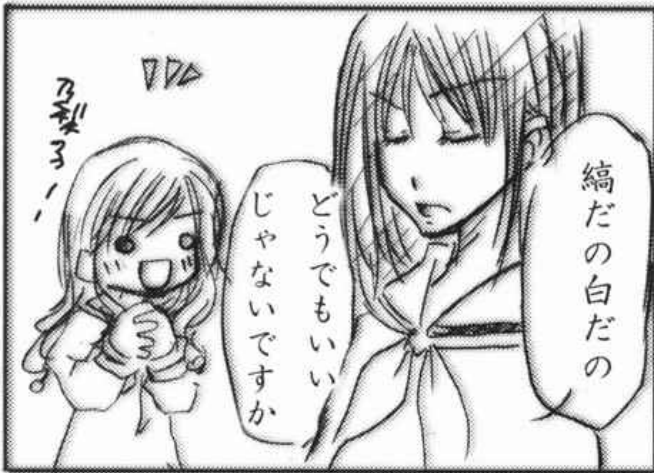
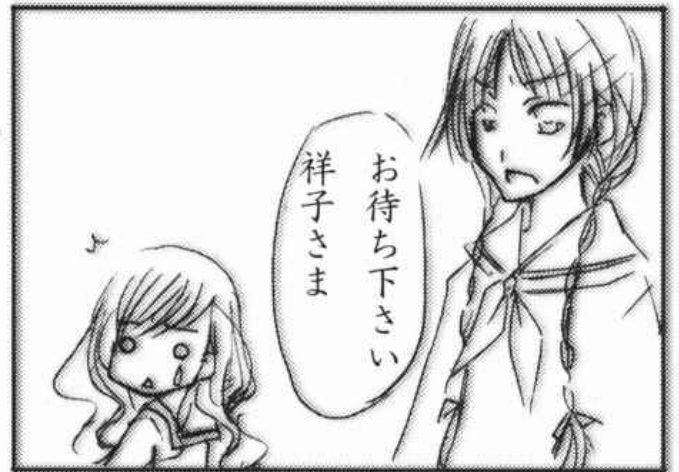
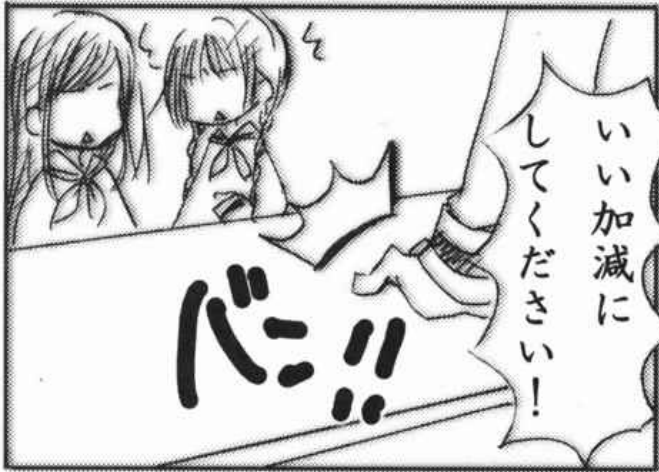
ひとつになってしまえたら
いっしょ

…本当

しま んぱ

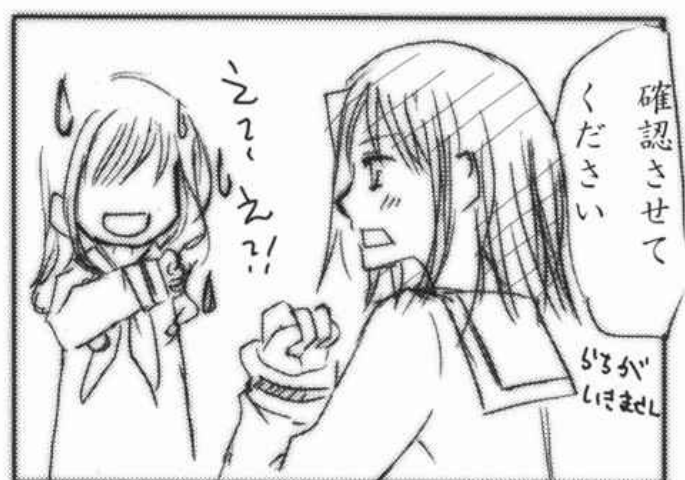
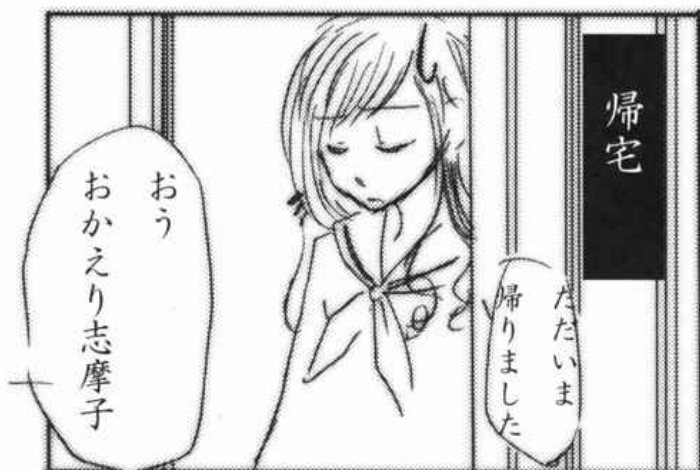




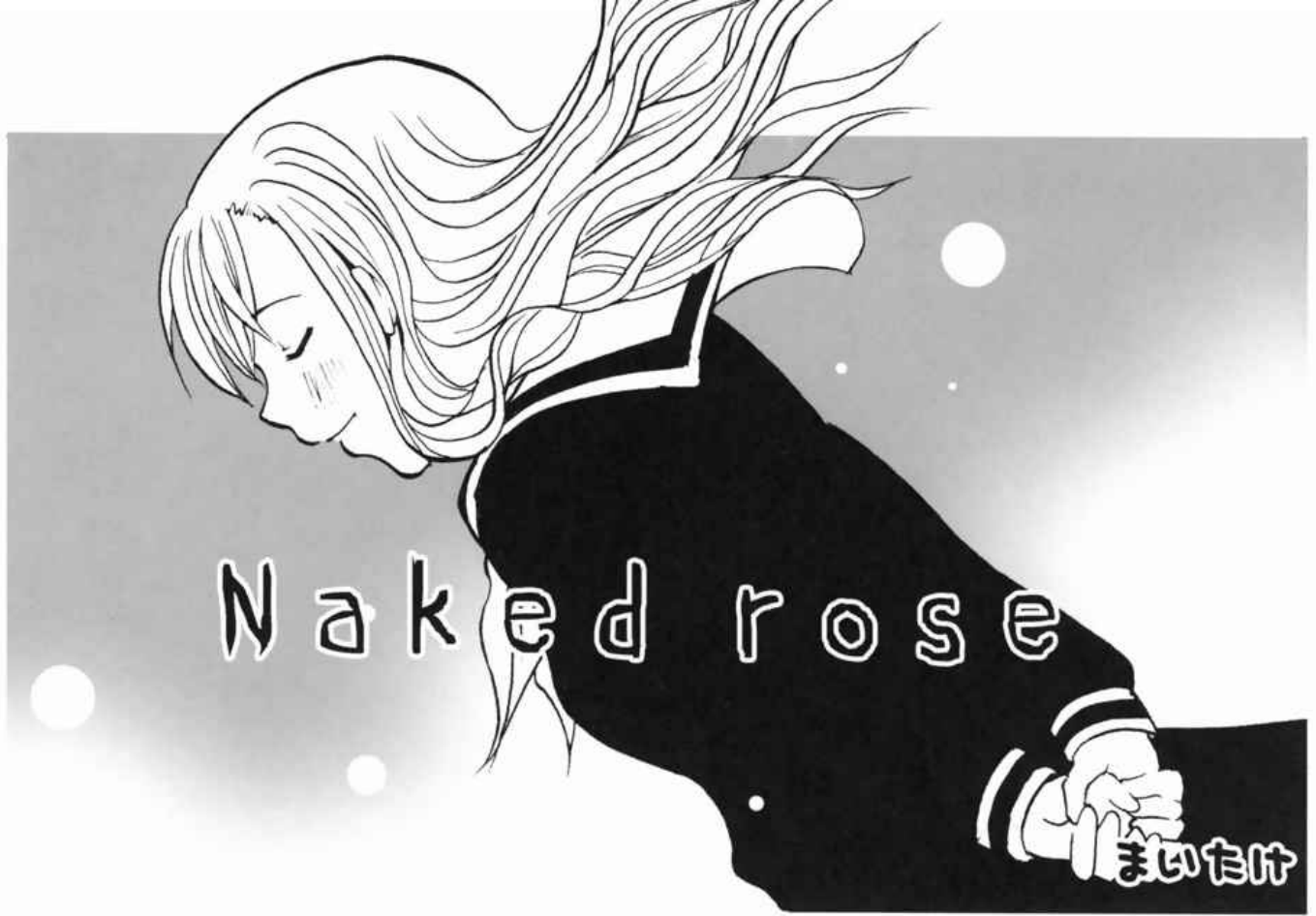


かんちがい

かくにんさせろ







Naked rose

つまりね
私は考えた
わけよ

普段お堅い
志摩子のサービス
シヨットを

どうやれば
見られるかって

最初に考えたのは
野球拳？

でもそれって
オヤジ臭い
じゃない？

そこで逆転ホールインワン

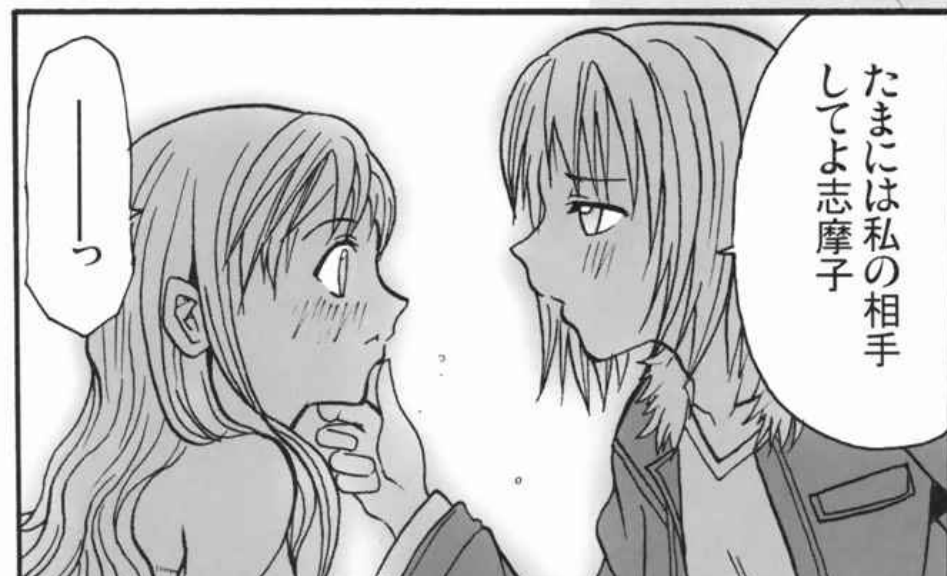
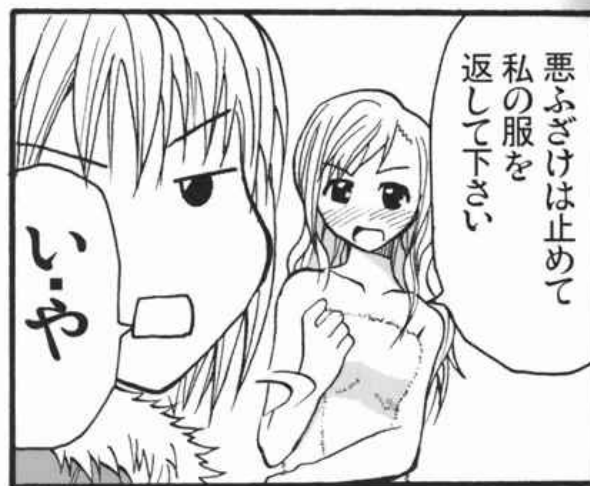
最初から脱いで
ジャンケンに勝てば
服を着れる

着衣野球拳

ブル

ブル

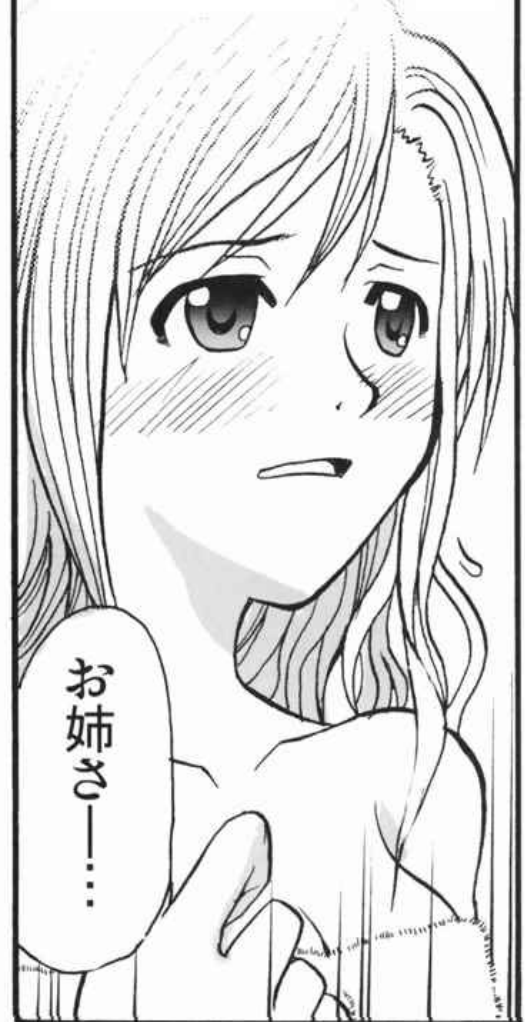
ブル





ちなみに勝つて
着ていく服は
こういうの
用意してみました

そうですね
お姉さまは
そういう方でした



お姉さー！...



そういった服は
結構ですので
元の制服を早く
返して下さい

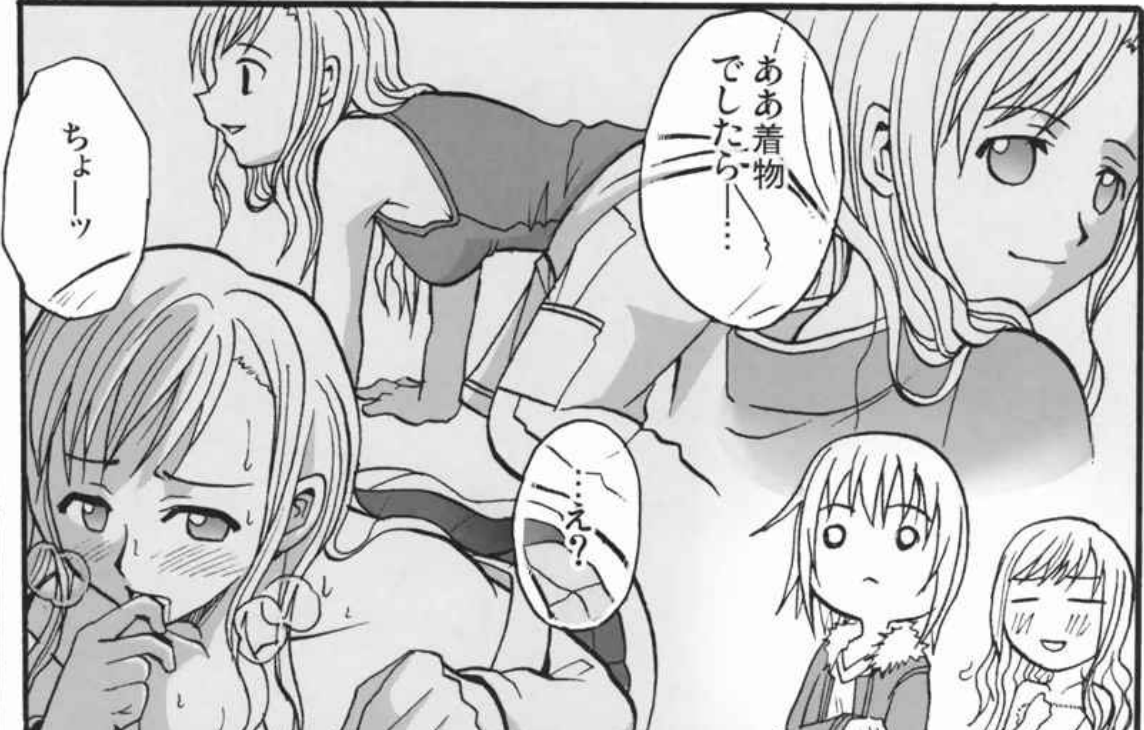
えー
それじゃ
つまらない
じゃん

じゃあ
こういうのは？

水着の意味が
わかりません



バコバコ



ああ着物
でしたら...

ちょーッ

え？

なんでそう
嗜好がオヤジ
なんですか！

ごめん
今のはちょっと
やりすぎた

……こんなこと
しなくとも
会いたかったのは

私も
一緒ですから――

志摩子……

そうだね
こういうのは
私達らしく
なかったね

お姉さまっ

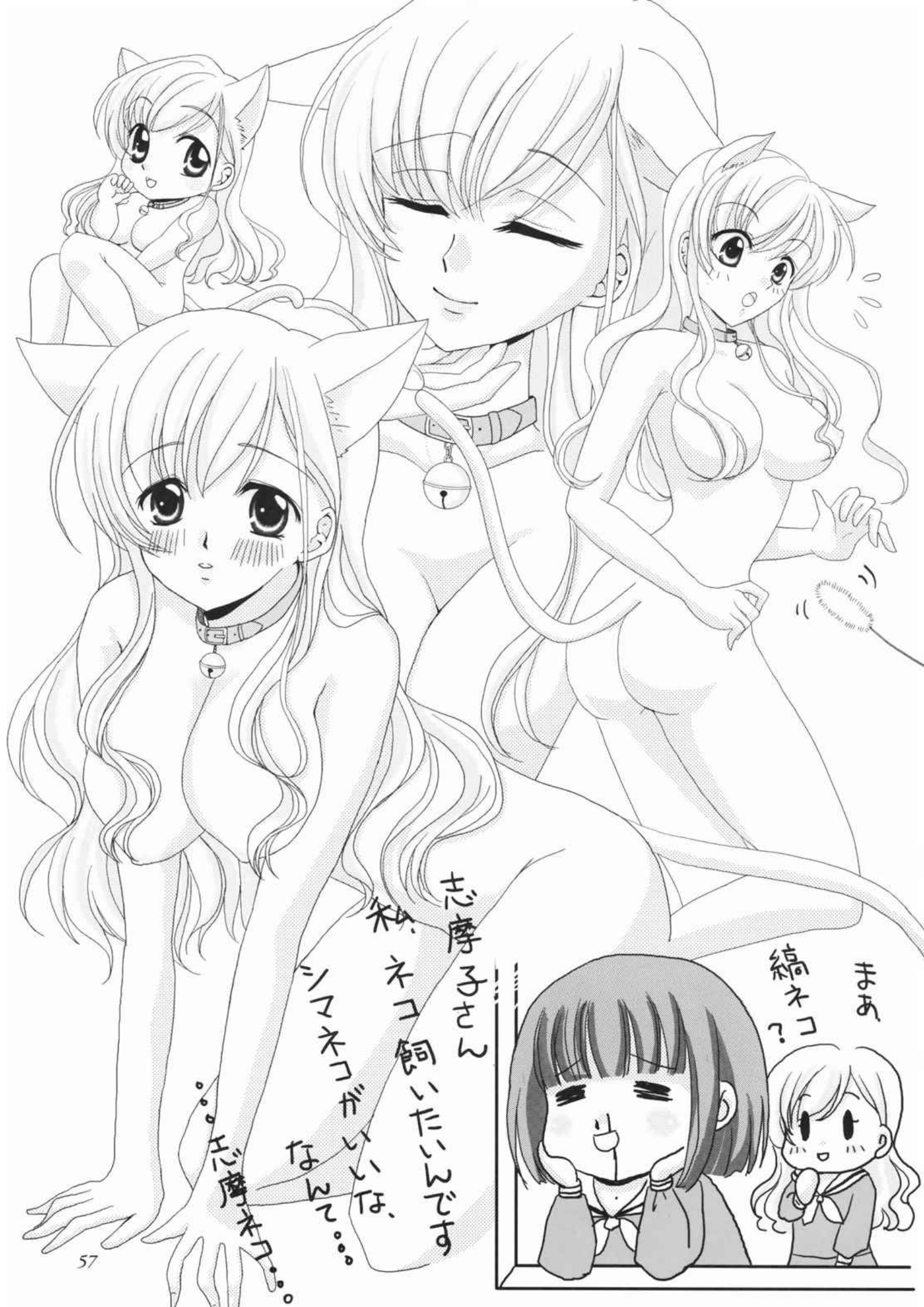
よしじゃあ
改めてお願い
させて貰うよ

祐巳ちゃんにネ♪

やっぱり(ういう)野球拳
遊びは祐巳ちゃんだ！

結局それがしたい
だけですかッ！

ナイスパンチ
マイルール！



志摩子さま
ネコ飼いたんです

知、シムネコがいいな。
なんて...

。。。。
志摩子さま。。。。

志摩
縞ネコ？





いえ…
これくらいのこと
お安い御用です

いやあ悪いね
魔法少女志摩子

ノートを取りに行く
手間が省けたよ
ありがとう

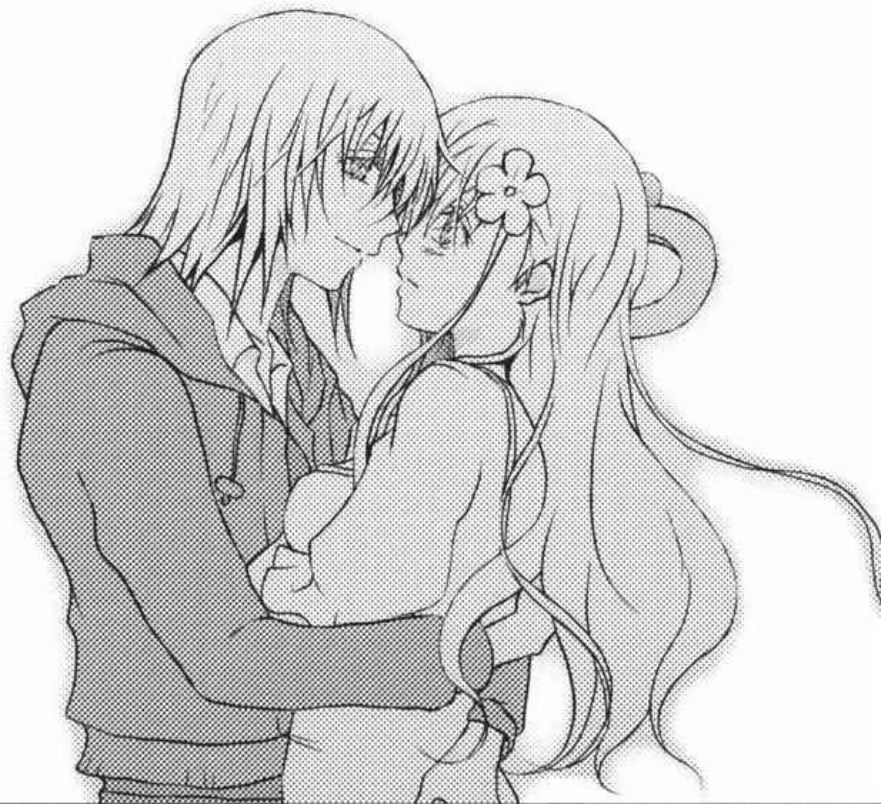
魔法少女志摩子
ききいっばつ!?
冬弥きよひさ



ふうん…

聖さまの
お役に立てたなら…

こちら嬉しい
限りですから…



ち…
違います…

確かめたら
確かめさせてよ…

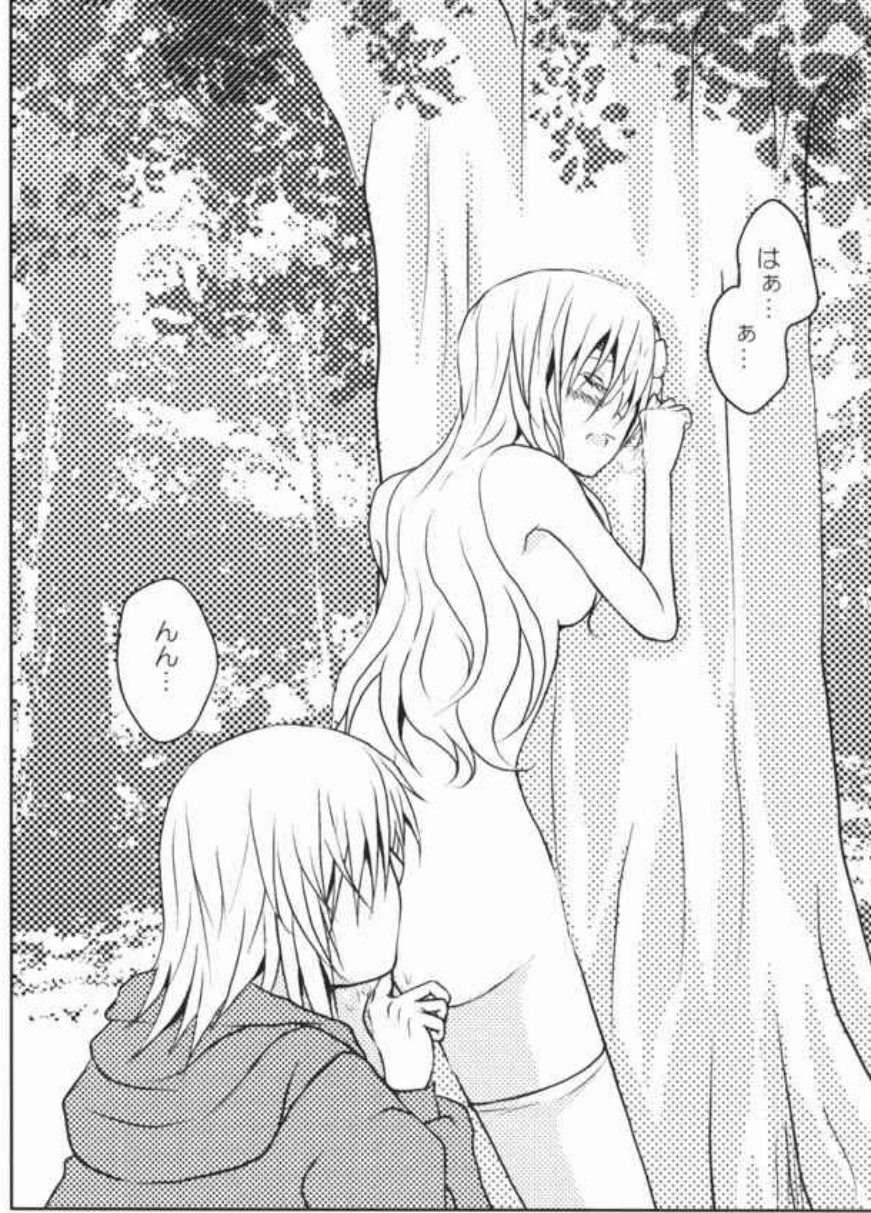
キミの正体は私の
良く知っていないから
：なんじゃないかって

—やっぱりキミの
ことがどうも
興味深くてね

せ…
聖女か？









—どうしましよう…
もう私の正体がバレて
しまつて…

うん…

やっぱり人違い
だったみたいだわ



えっ…ちよ…

ええっ!?

私の勘違い
だったみたい

ごめんね魔法少女志摩子
ここまでやらせちゃつて

だえ…でも
だつて…



もう…

お姉さまの
いじわる…



またキミのことが
気になったら…

その時はさっきみたいに
調べさせてもらつよ



—…つて
うおっ!?

このノート
加東さんのじゃん!

時をかける乃梨子



ごきげんよう過去の
お姉さま♥

藤堂志摩子ちゃん!



?

志摩子ちゃんさー
カトリックやめて
仏教にしなよ

あつお姉さんはね
志摩子ちゃんの為
にやるばる未来から
やってきたの!

志摩子ちゃんが
誤った道を進む前に
正しい道に導いてあげるね

ほらこのお数珠で
お尻の穴が気持ち
よくない?(笑)



んっ

んっ

素直に仏教徒になってくれたらお家に帰してあげるんだけどな

コウ
コウ

あらあらウソは大罪だよ
志摩子ちゃんの信仰心は
簡単に挫けないんだから

こりゃあこの
仏様におしおきして
もらいましょ

はいご開帳！

んんん
ひっ
ひっ
ひっ
ひっ

あつ観音開きしたから
観音様の方が良いかな？
あはっ

ナリ
お
あ

これ私が造った仏像
なんだよ！これからも
沢山造ってあげるね！

今から志摩子ちゃんのお腹の中に仏様が
入られまーす！

又ポポ

というネタで
次のコミケに挑もう
と思うのですが…
どうですか令さま

へー陵辱でくる
とは意外だね！
容赦なくて良いね

でも狙いすぎて
分かりにくく
なってるかな？





おわる。



は
やあっ...そんな
お姉さまっ
乃梨子の前でなんて
んあ

何でしょう?
お姉さまとして
志摩子が
答えてあげなきゃ

聖さまっ!
志摩子さんに何を!

だから?
余計に感じちゃう?

ん
や...っ

ズク

ズク

日陰の薔薇

ヤマグチタカシ



私にも?



えっ...!?
うそっ本番:
...本物だなんて
なんで聖さまにも

答えないなら
止めちやおう



うあっ…
志摩子さんのこと
凄いいい…
良すぎるよっ

あっ…
乃梨子のも
素敵よ…んっ

志摩子さんとは
出来るなんて…
夢みたい…だよ

私もよ
乃梨子とも
一緒に…嬉しいわ

どう？志摩子…
姉を銜えながら
妹に貫かれる…

志摩子は奥の方が
弱いから
もつと突いて

は、はい
志摩子さん、
このへん？



ついに迎えた新婚初夜！
しかし寄り添う二人の間には
ぎこちない時間だけが過ぎていく……。
志摩子さんの人に言えない秘密とは？



奥様は
生えてない

三月 剣

illustration 大塚素之

奥様は生えてない

年齢二十も半ばを通り越して、一回りは行かないが、まさか年の差が八つもある女性と結婚することになるうとは、思いもしなかった。

法律的には何ら問題はないはずなのだが、どういうわけか周りからは「奥様は少女」とか、「奥様は女子高生」などという揶揄をいただくこと多々である。

さすがに、女子高生と結婚したわけではない。きちんと、彼女が卒業するまで待ったあたり私に私の誠意を感じ取ってほしい。

大差ないというご意見は胸に留めておくとして、間違っても少女嗜好とか思わないでいただきたい所存。

彼女、すなわち私の妻である女性の名前は「志摩子さん」という。

夫婦ならば呼び捨てでも、と思われるかもしれない。けれど私にとって、彼女は「志摩子さん」と呼ぶ方がしっくり来る。

彼女と出会って以来、そのように呼び続けていたせいもあるだろう。

一度、結婚してからも「志摩子さん」と呼ぶのは、やはり変なのではないかと周りから指摘を受けたので、「お前」とか「母さん」とかも考えたのだが、どうもしっくりこない。

子供ができれば「母さん」も悪くないかも

れないが、夫婦水入らずのうちにはせめて「志摩子」と呼び捨てにするのがよいだろう。

一度、彼女にどのように呼んだらいいかと尋ねたら、好きに呼んでください、とのことだった。

だから私は彼女を「志摩子さん」と呼ぶ。

志摩子さんと幸せに生きることが、これから私の生きがいだ。

二人で、一緒に歩んでいこう。

ずっと、ずっと。

これは、そんな志摩子さんと私とを取り巻く日々の記録なのである。



夫婦になって最初の仕事、というべきか。いわゆる新婚初夜という行事のことだ。

やましいことは何らなはずなのだが、相手が一回り近く若いせい、か、すごく気恥ずかしい。

己の経験が浅いこともこの落ち着きのなさにつながっているのだろうか。

とはいえ、志摩子さん自身も乙女の園と称される女子高等学校出身なので、それほど経験が多いとは思えず、二人して気恥ずかしい思いを抱えながら、ぎこちなく時間だけが過ぎてゆく。

お互い、寝巻きのまま布団の上で見つめ合うのも、そろそろ限界だ。

意を決して、志摩子さんに問う。

「い、いいかな？」

何がだ。

いかん。自分で突っ込んでしまった。

この状況でいいかな？はないだろう自分。

今日はもう無理だと諦めかけたそのとき、奇跡的な出来事が目の前で起きていた。

たとえるならば、女神降臨といったところか。

しゅるりと寝巻きが開かれていく音とともに、暗がりの中でもはつきりと映る白い肌、

思わず目を奪われた。

「きれいだ」

そこには、微塵も劣情など入り込みようはずがない。

純粹な美に対しての感動が支配していた。

小さすぎず、極端に大きくもなく、たわわに

実った彼女の乳房は、それこそ胸の黄金率とも

いえる形に整っていて、その先端は名称の由来

となった果実の通り、綺麗な桃色に染まっていた。

徐々に下へと視線を移していくと、これだけ

立派な胸を支えるのに、これだけの細さで大丈

夫なのだろうかと思えるほど引き締まった腰ま

でのライン。

やがて、腰まわりからそのラインは緩やかに

広がっていき、胸から腰までにかけて、いわゆ

る女性体型の黄金率が、これでもかと主張され

ている。

彼女は、妻としての器量・裁量だけでなく、肉体そのものまでもが完璧な女性だった。

コンプレックスの強い男ならば、それだけで自らの一物が萎縮してしまい、そのまま精神的勃起不全に陥ってしまうのではなからうか。

幸いにして、そのようなことにならなかつた理由としては、彼女、志摩子さんの体毛が極めて薄いということに尽きる。

西洋、北欧の女性は体毛の処理の一環で、陰毛を含めて綺麗に整える、あるいは剃毛してしまふことさえもあるという。

が、彼女にはそれが要らない。

処理すべきものがないのだ。

いわゆる、麻雀の白い牌。

正確には、近づかなければわからないほどの産毛はあるのかもしれない。

それでも、見えないものは無いに等しい。

黄金率の女性体型に、あるべきものが無い。

概念だけで言えば、あのヴィーナスの彫像を彷彿とさせる。

欠損の美学などというものに通じているわけではないが、ただ、この場合の美しさは人を選ぶと聞いている。

そして、それはほとんどの場合は事実だ。

志摩子さんは、あるべきものがないことに対して、コンプレックスを少なからず有していた

ようで、先ほどから頬を赤らめたまま俯いている。

違うんだ、志摩子さん。

私は、私は生えてない方が好（何者かによって削除されました）

彼女の身体は、無の美学、いや無毛の美学を体現していると言っても過言ではない。

半ば理性の吹き飛んだ頭で、

「オレ、がんばるから！」

とよくわからないことを口走りながら、彼女を抱きかかえて横になった。

彼女ははじめ、きよんとしていたが、彼女のコンプレックスを、私が気にしていないことを理解するとほんの少し安堵したようだった。

いや、だから志摩子さん。

生えてないは正義、なんだって！

◇ ◇ ◇

つつがなく、人類を未来永劫へとつなげていくための大切な最初の共同作業を終え、二人で眠りに落ちる。

子宝に恵まれる可能性を高めるには、一度に夫が三度は妻の身体にその愛と熱意を注ぎ込まねばならぬらしい。

志摩子さんがご所望とあらば、求められるがままに、毎夜の如く自らの愛情をもって子種を

注ぎこむ。

男として、これほど冥利に尽きることはない。

一つだけ願うならば、志摩子さんのような無毛の美学の体現者が、自らの肉体にコンプレックスを抱かないでくれることか。

生えてないは正義。

生えてない方を求める世の男は、そう少なくはない。

三月 剣（みづき けん）／miduki-s

miduki64@gmail.com

http://aquablue.tuzikaze.com/

http://d.hatena.ne.jp/miduki-s/

しまけっと

Adult Edition

みなメイドで
志摩子さんを
愛してくださるいな♡

2007年11月3日 (祝)
大田区産業プラザPio
(小展示ホール)

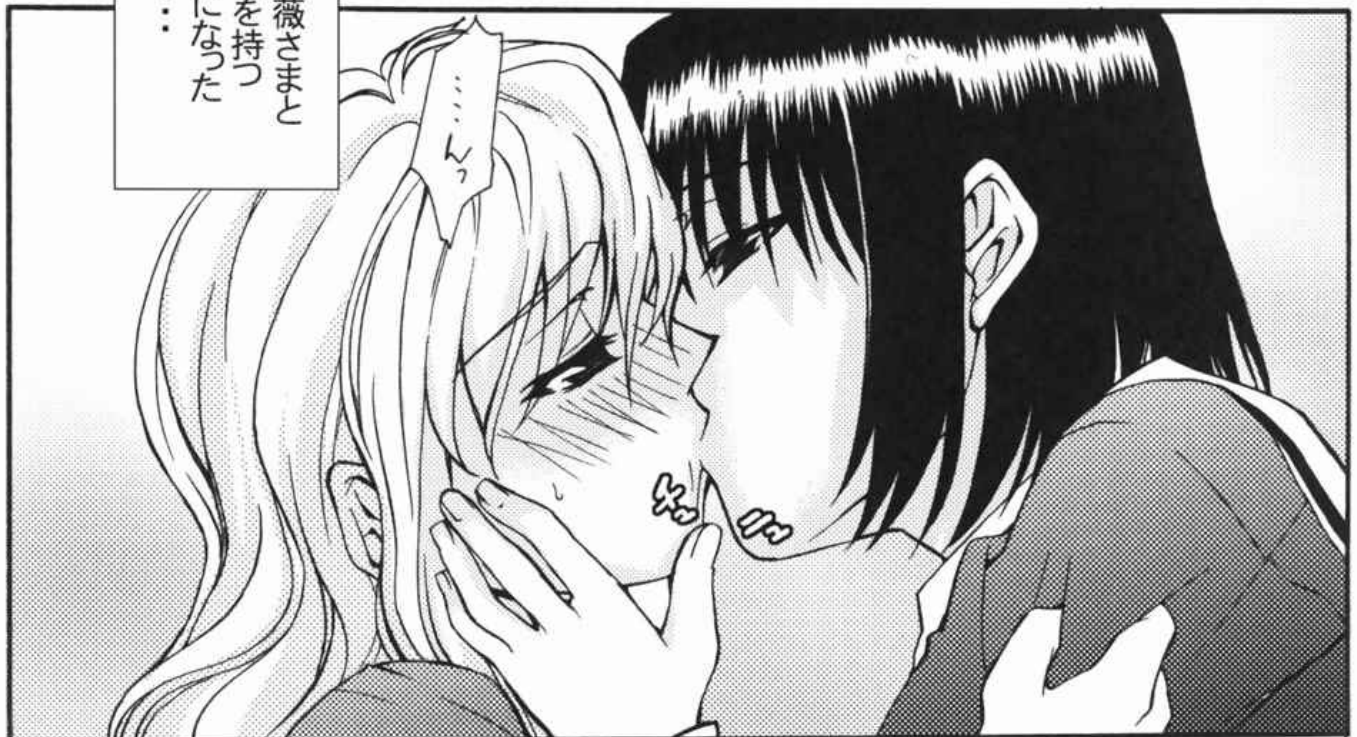
※18歳未満のサークル参加及び一般参加は出来ません。



と・う・ひ
『TO・U・HI』

描いた人
岩飛 ペン太

紅薔薇さまと
関係を持つ
ようになった
のは...





薔薇の館で
自慰行為を
見られてしまった
事からだった。



あ、あの...
ロリ・キネシス
紅薔薇さま...



ロリ・キネシス
紅薔薇さま
こそ本当は

なに？
やっぱり
好きでもない
相手とするのは
気が進まない？

好きな方が
いらつしやるの
でしょう??



.....



と
キッ

私の「ト」は
気にしないで
良いわ...

志摩子はただ
感じてさえ
いてくれれば...



でも



あつ



コン

コン

紅薔薇さま
今、よろしいですか?

祐口ちゃん?
ちよつとまじって



この部屋は
私と志摩子で
整理するから

しばらく誰も
入らないでって
いったじゃない？

ヤ、ヤ、ヤ、ヤ、ヤ

他の部屋の
整理をしていたら
以前紛失した書類が
みつかりまして…

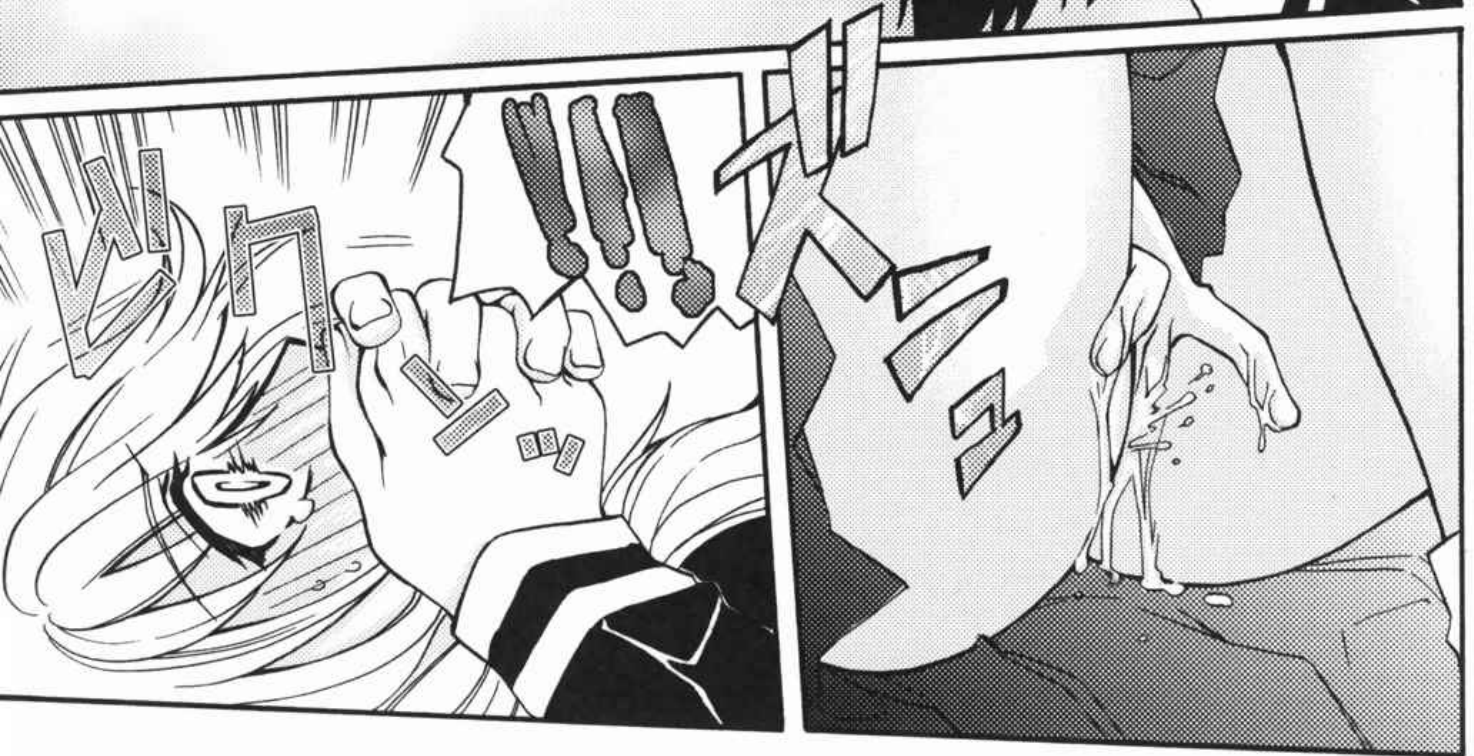
それで・・・お姉さまが
ロサ・キネン
紅薔薇さまに
持つて行くようにと

困ったわね

今書類広げてる
から他の書類
混ぜたくないのよ

悪いけど
ドアの外に
おいといてくれる？

それとも
志摩子が書類
取りにでてくれる？



ひどいです
ロサ・キアメン
紅薔薇さま……

!!!
おいただきます。

志摩子も
手かはなせなから



志摩子があまりにも
可愛らしくて…
つい…ね



ごめんなさい



分かって
わざとあんな事…



泣かないで

泣かないで

貴女は知らなくていい

志摩子…

私が誰を好きかなんて



私が貴女と体を重ねるのは



愛してるわ。。。

貴女を通してあの人と

繋がっていたい……から

あ……

ね

だ……だめ……
オカシクならなやう……うー

感じていたいから……

……紅蓮回教さ……？

……とまあ
こんな小説を

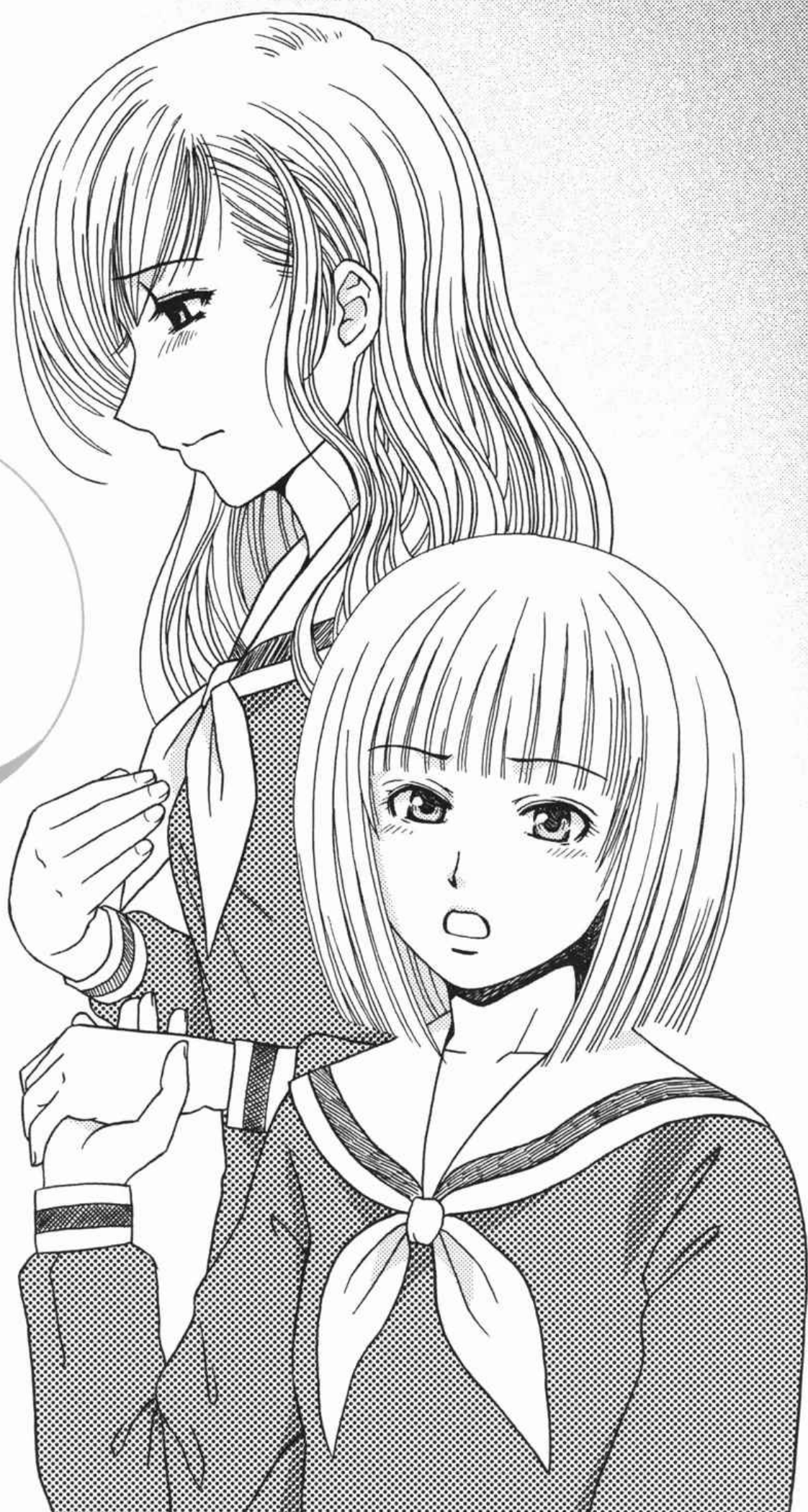


コシが本当の現実逃避。

ホントすいません...



季節外れの怪談



碧城

季節外れの怪談

1

ある土曜日の昼下がり。中高等部図書館の閲覧室に三組の姉妹が連れだつて現れると、静かな室内が一瞬ざわめいた。「学園祭の準備に忙しい山百合会幹部の面々が一堂に会するとは何事であろうか？」というわけだ。

もちろん学園祭の準備と無関係では無い。恒例の劇以外にも『生徒会』らしい企画展示を出したという案が出たので、各々が持ち寄ったテーマについて事前調査をするために集まったのだ。

白薔薇姉妹の選んだテーマは『リアンの歴史について』。

明治以来の歴史ある学園だけに、何十周年という節目のたびに分厚い学園史が何度も編纂されて、それだけで書架の一角を占拠している。でもその中身ときたら『講堂を建てるのに誰某がいくら寄付をした』なんて話ばかり。そこで、『姉妹制度の由来』であるとか『伝説の薔薇さま』といった、もっと生徒の関心を引きそうなテーマを通して学校の歴史に親しんでもらおうという企画だ。乃梨子はズラリと並んだ学園史（とりあえず目次だけ）に目を通すうちに、奇妙な点を見つけた。昔の学園史には『空襲犠牲者追悼ミサと平和祈念碑の建立』と題した章があり、太平洋戦争の末期に空襲で亡くなった生徒がいたことや、遺族

の寄付により祈念碑が建てられ追悼ミサが催されたことが写真付で載っていた。ところが、ある年を境に学園史からこの項目が消えてしまったのだ。

もちろん戦災に関する章で死者の出たこと、追悼ミサが行われたことは触れているのだが、祈念碑に関する記述はばつさり無くなっている。

編集の都合かと思つた、前後の項目はほとんど手が加えられていないのだ。この部分だけ削除しなければならぬ理由があつたのだろうか？

さらに溯つて戦争直後の学園史を紐解くと、キャンパスの地図にはつきりと『平和祈念碑』の文字が印刷されていた。乃梨子は、なんだか宝の地図を発見したような気分になつていた。真相はともかく、こういうミステリーっぽい話も企画として面白そうだよ。

広げた地図を志摩子さんが覗き込む。

「そんな所に石碑なんてあつたかしら？」

そう指摘されて地図を見直してみた。今とは建物の配置が違うが、間違いない。

「ここって……講堂の裏の桜のそばだよね？」

銀杏の林に佇む一本の桜。そこは二人が出会い、二人が姉妹になつた大切な場所だ。確かに、そんな石碑を見た覚えはないような。でも、単に気付きにくい場所で見落としているのかも。

この事に気づいたも何かの縁かもしれないと思ひ直し、実際にその場所へ行つてみることにした。

講堂の裏まで行つて古い地図と見比べると、現

在の講堂は昔の講堂よりかなり大きいようだ。地図上の『平和祈念碑』の位置は、現在の講堂が立つている敷地に重なる。

改築に当たつてどこかに移されたのではと周囲を歩くうちに、石材がいくつも転がる草むらを見つけた。昔の講堂に使われていたのであろう彫像や柱に交ざつて『紀元二千六百年記念』なんて刻まれた石碑もある。そして、二人の探していた平和祈念碑もそこに横たえられていた。

乃梨子にはだいたい状況が判つてきた。祈念碑の記述が消えた時期は、講堂を建て替えた年代と一致している。おそらく、工事のために一旦移動したまま忘れ去られ、後に撤去されたと思ひ込んだ誰かが学園史の記述を削除してしまつたのだ。（こんな簡単に見つかるんだし、確認くらいすればいいのに）

謎は解けたけど、なんだかすつきりしない。ついでに言うと、ミステリーの解決編としてもあまり面白く無いのでちよつとがっかりした。

「どこかにこの祈念碑を立てられないかしら」

優しい志摩子さんらしい提案だし、実は乃梨子も同じことを思つていた。それほど大きくない石碑なので、二人掛かりなら充分に持ち上げられそうに思われる。学校側なら石材業者にでも頼むのだから、できることなら再発見した私たち自身の手で立て直してあげたかった。

「そうだね。正式に設置するには学校の許可が必要だけど、とりあえず起こすだけでも」

そうと決まれば実行あるのみ。

とは言え、石碑は半ば地面に埋もれているので、土を掘り返すとすると制服のままでは汚れてしまう。まずは更衣室で体操着に着替えてから、環境整備委員会の一輪車とシヤベルを借りて講堂の裏へ戻った。

石碑を傷つけないように周囲を慎重に掘り下げていく。湿った土の匂いって何だか懐かしい気分になるよね。

「思ったより深く埋まっているわね」

「でも埋まってなきや埋まってないで、下からムカデやらダンゴムシやらゾロゾロ出てくるんだから、それよりはマシじゃないかな？」

それを聞いた志摩子さんは「すごいプラス思考ね」と言って笑った。

掘り出した祈念碑にこびりついた土を木ベラで削ぎ落とし、さらにブラシで擦り落として行くと、聖書の詩編らしき一文と数人の名前が現れた。

祈念碑を立て直す場所は桜の木の見える場所に決めた。まずは地面を少し掘り下げて水平になり、台座を運んで据え直す。

そしていよいよ石碑の本体を台座に建てる。

「せえのっ、よいしょーっ！」

「よいしょっ！」

二人で力を合わせて持ち上げると祈念碑は台座にストンとはまり、無事に設置することができた。

仕上げに水を掛けてタワシで良く掃除をすれば、文字に詰まった土も洗い流されて鮮明に浮き上がってくる。長年放置されていたには大きな傷もない。少し離れて見ると、元々そこにあっ

たかのような自然な雰囲気だ。

二人はきれいになった平和祈念碑に花束を供えて手を合わせた。乃梨子は、犠牲者の名前の一冊上に刻まれた『四月八日・白河久子』の文字が何故だか妙に印象に残った。

薔薇の館に戻りついたときには既に日は傾いて、西の空が黄色く変わり始めていた。志摩子さんは玄関の前でふと足を止めて振り返り向いた。

「遅くまで手伝わせてしまつてごめんなさいね」

「ううん、気にしないで。私もこうしたかったんだから」

そう答えると、志摩子さんの顔に笑みが戻り、スカートをふわふわと翻しながら軽やかに薔薇の館へ入っていった。

乃梨子も続いて中に入る。階段を上つて二階の部屋に入りかけたところで、志摩子さんは頭を押さえてしゃがみ込んでしまった。

「志摩子さんどうしたの！ 大丈夫？」

「大丈夫よ。でも……なぜかしら、さつきから誰かが耳元で囁いているような気がするのよ」

「頑張り過ぎて疲れたんじゃない？」

「そうね。着替えたら早く帰りましょう」

本当なら体育館の更衣室を借りに行くべきだが、薔薇の館からは少し遠い。この時間に訪問者も無いだろうということで、二階の部屋のカーテンを閉めて着替え始めた。

土を触った後なので体操着は埃っぽかった。スパッツを足から抜こうと片足を上げたところで、

乃梨子はバランスを崩して軽くよろけた。

（私も少し疲れたかな？）

鞆にレモン風味の喉飴が入っていたのを思い出し、袋を剥いて口に入れた。こんなとき酸っぱいキャンディを舐めると、なんとなく疲れが取れるような気がする。

（そういえば、志摩子さんって学校ではどんな下着を着けてるんだろう？）

そう思って横目でチラッと覗いたが、既にスリップを着た後で良く見えない。視線を腰から胸へと上げていくと、何か言いたそうな顔でこちらを見ている志摩子さんと目が合った。ちよつと気まずい。

その時だった。

不意に志摩子さんの顔が近づいて、乃梨子の唇に柔らかい物が触れた。

「？ ……むごっ!!」

それは志摩子さんの唇だった。二人はそのまま抱き合うようにして倒れた。志摩子さんは左手でがっちりとなり梨子の頭を押さえ、右手であごを押し下げ、歯の隙間から舌を割り入れてくる。それは愛情表現を超えて、衝動に突き動かされるような暴力的なキスだった。キャンディの溶け込んだ唾液に気管が刺激されて咽込んで、志摩子さんの唇は離れようとしなない。

乃梨子はもがきにもがいてようやく志摩子さんを組み伏せた。

「ちよつと待つて！ 何か変だよ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

乃梨子が怯えた表情の志摩子さんの顔を間近に見ながら、なんとか冷静さを取り戻そうとしていたそのとき、背後でガチャリと音を立ててドアが開いた。

乃梨子は、恐ろしくて振り向けなかった。

2

祥子は何かおきているのか理解できなかった。

正確に言うと、薄暗い室内に白薔薇姉妹が居て、床の上で下着姿の体を重ねているのは認識した。だが、それが意味する所を理解する前に脳のブレーカーが落ちて思考が停止してしまったのだ。

気まずい沈黙がたつぷり一分はあつただろうか。ようやく硬直の解けた祥子は、顔に驚愕の表情を貼り付けたまま、やつとの思いで言葉を絞り出した。

「……なっ……ななな何をしているの……あなただ達っ！」

「い……いやあの、その、つ……つまりこれは、この、そ、その何というか……」

乃梨子は志摩子の上から飛び退き釈明しようとしたが、哀れ、動揺のあまり言葉にならない。

客観的状况としては『上級生を押し倒して』『下着姿で抱き合つて』いるわけだから、どんなに気の利いた言い訳をしても詭弁にしか聞こえないだろう。結局は会話がかみ合わないまま、再び『気まずい沈黙』に逆戻りしてしまった。

祥子にしても、こうして睨み合つていたところ

で何の解決にもならないのは分かっていたが、一度振り上げた拳をどこへ下ろしたものやら途方にくれていた。

そこに遅れて現れた令が祥子の肩越しに室内を覗き込んで、一言。

「あらま、大胆。やるなあ乃梨子ちゃん」

この間の抜けたコメントのおかげで、場の緊張はガクつと崩れたのだった。

志摩子と乃梨子は審問を受けるべく、とりあえず下着姿のまま席に着いていた。

「志摩子はさつきから黙つたままだけど、何か言うべきことはないの？」

祥子がそう問いかけると、志摩子はようやく口を開いた。

「実は、戦没者追悼の祈念碑を建て直していたら、耳元で声が聞こえてきたんです」

それだけ言うと、再び黙り込んでしまった。痺れを切らした祥子が口を開く。

「それで、さっきの醜態とその声にどんな関係があるって言うの？」

「……乃梨子の顔を見ていたら突然強い感情が入ってきて、……その、発作的に乃梨子を押し倒してしまつたのですけれど……」

俄かには信じがたい話だ。そう言う志摩子自身もあまり自信が無いようで、上目遣いで三年生たちの様子を伺っている。

「もう少しマシな言い訳は無かつたの？」

祥子は憐れむような表情を浮かべた。

「まあいいわ、続けて」

「はい。私にも訳が分からないんですが、遠い昔の記憶とか、感情とか、ここにいる藤堂志摩子ではない『誰か』の意識が私の中に入ってきたんです。そうしたら、どんなに愛しているか伝えなくちゃいけない気がして。……おそらくそれも、その『誰か』の感情だと思んですけど」

志摩子の話は次第に怪談じみてきた。黙つて話を聞いていた令が、乃梨子の方に顔を向けて切り出す。

「志摩子は愛を伝えようとしたと言っけど、乃梨子ちゃんはずいぶん抵抗したみたいね。単刀直入に聞くけど、志摩子はあなたに何をしたの？」

「……キスです」

それを聞いた祥子は目を丸くした。

「キス？ それならなぜ受け入れないの？ 女同士とはいえ、お互いに好きならキスくらいしてもよいのではなくて？」

「あらあら、白薔薇姉妹って随分と奥手なのね」

「お言葉ですが、私だって普通にキスされたのなら拒みません」

乃梨子は不服そうにそう言ったが、仔細を説明しても恥の上塗りにしかならないので黙つていることにしたようだ。

「それで、志摩子の言う『誰か』はもう出て行ったの？」

「いえ、まだ一緒です」

「一緒に、どういう意味なの？」

「私にも訳が分からないんです。私は藤堂志摩子

で……でも、記憶の中では、妹が倒れた私を悲し
そうな顔で見ているんです」

そう語るうちに、志摩子の目からは涙がぼろぼ
ろとこぼれた。祥子の目には、今の志摩子は感
情の起伏が極端に激しくて、うまく自分をコント
ロールできていないように映った。

「それで今は、二人分の人格が混ざって不安定な
状態なのかしら？ でも、乃梨子ちゃんは、記憶
の中の『誰か』ではなくて、志摩子の妹なのよ。
どうして乃梨子ちゃんを押し倒したの？」

志摩子さんは乃梨子の方を見る。
「妹は乃梨子に良く似ているんです。……ずっと
会いたかった」

再び感情の波が押し寄せたのだろうか、志摩子
の顔はたちまち紅潮こうしゅうしていった。

「お願い乃梨子、もう乱暴にしないから、嫌いに
ならないで。本当に愛してるのよ」

熱く言い寄られている乃梨子は完全に腰が引け
ていた。志摩子も眉根まゆねを寄せて押し寄せる衝動を
必死に抑えているようだが、妙に甘い息遣いきづかいに見
ている方が気恥きぢずかしいくらいだ。

「ちよっと相談するから、待ってらっしゃい」
祥子と令は素晴らしい残すと、白薔薇びやくぎ姉妹を部屋
に残して廊下に出た。

志摩子は嘘を言っているようではないが、あま
りにオカルトじみているし、腑ふに落ちない点が多
すぎる。これをどう理解したら良いのだろうか？

「祥子はどう思う？」

「どう思うも何も、志摩子は敬虔けいけんなカトリックな
のよ？ その場凌しのぎの出来かせて死者の魂を言い訳
に使うとは思えないわ。」

「じゃあ、この話を信じるの？」

「まさか。志摩子自身が無意識に作り出した幻覚
だわ。あの子は禁欲的過ぎるのよ」

「どういうこと？」

「『妹と愛し合いたい』という強い願望がどこか
ら来たのか、それが問題なのよ」

祥子の表情は険しくなった。乃梨子を押し倒し
てしまうほど激しい感情が、外から『入ってきた』
ものでないとしたら――

「……志摩子の乃梨子ちゃんへの気持ち？」

「もちろん志摩子は認めないでしょうけどね」

「その感情が充足されれば、どちらにしても志摩
子は元に戻るといふことね？」

「まあ、そういうことにしておきましょう。少な
くとも、あんな状態で帰らせるよりはマシだわ」

祥子はそう言いつつも、一抹いちまつの不安を感じない
ではなかった。

「……取り乱してすみませんでした」

祥子たちが部屋に戻ると、正気に戻った志摩子
が肩を狭めてしょんぼりと座っていた。結局また
押し倒されたのか、乃梨子の首筋にはさらにキス
マークが増えていた。

「仕方ないわね。志摩子、乃梨子ちゃん。今日は
特別にこの部屋を好きに使っていいわよ」

「それはどういう意味で……」

「それはね、こうなったら覚悟を決めて、行くと
こまで行っちゃいなさいって意味よ」

「行くところって……えーっ!？」

志摩子と乃梨子は、予想外の展開に目を白黒さ
せている。

「妹と愛し合うのがその『誰か』の願望なのでしょ
う？ あなた達が思うさま愛し合えば成就じゆうじゆされる
のでなくて？」

「祥子さま、あの……それで宜しいんですか？」

「あら、志摩子は何か不満が有るの？ 私はね、
仮にも本校生徒の代表である貴女に、そんな破廉
恥はれんちな状態で街を歩かれては迷惑だと言っている
の。それとも、他に良い解決法でもあつて？」

祥子は不愉快そうに冷たく言い放った。

「あの、……いえ。そうさせて戴きます」

志摩子がすっかり萎縮いしゆくして応じると、祥子は華
やかな笑みを浮かべてまくし立てた。

「そう。理解してもらえて良かったわ。あら、こ
んな時間。祐巳ゆみたちが待ちくたびれてるわね。令、
そろそろ帰りましょう。乃梨子ちゃん、戸締まり
を宜しく頼むわね」

「はいはい。それじゃ、ごゆっくり」

話が決まれば用は無いと、二人はそそくさと出
て行った。

外はすっかり暗くなっていた。

令は心配そうに振り返る
「本当に大丈夫かなあ？」

「大丈夫でしょ」

祥子は素っ気なく応じると、足早に校舎へ入っていった。

3

薔薇の館に取り残された志摩子と乃梨子は当惑していた。上級生に命令されて「愛し合いなさい」では雰囲気も何も有ったもんじゃ無い。というか、そんなに都合よく解決するものだろうか？

だが、志摩子さんをこんな状態で帰す訳にも行かないだろう。閉門時間を考えたら時間も無いし、下着だけの格好で突っ立っていたら寒いだけだし。他にも妙案がある訳でもないの、とりあえずさっきの続きから始めることにした。

あの時、何か思い出しかけていたみたいだから。幸い、今は志摩子さんも平静さを取り戻しているようだ。

「乃梨子、さっきの喉飴はまだ有るかしら？」

「私のはあれで済みですけど、お茶菓子と一緒にドロップの缶が」

流しの引き出しから出てきたのは、昔ながらの金属の四角い缶。振るとカラカラとドロップの転がる音がする。志摩子は黄色いドロップを選んで口に入れた。

「遠い昔の記憶……その時もレモン味だったの」

『誰か』の記憶は少しづつよみがえって来るようだった。志摩子の顔が乃梨子の前にすつと近づく。

「口を開けて」

志摩子の唇が乃梨子の口を塞ぎ、舌がドロップ

を送り込む。二つの舌はドロップを奪い合い、次第に唾液が粘って絡み合い、やがて混然一体となつて繋がりがあつた。濃厚なキスのもたらす絶え間ない刺激は快楽として神経細胞を伝わり、頭の芯まで痺れさせていく。

やがてレモン味のドロップは溶けて消えた。志摩子は乃梨子の下唇に溜まつた唾液を吸い上げると、さも美味しそうに飲み干した。

「ふふふ、口の周りがべとべとね」

そう言つて指の背で口元を拭う、その仕草もまた色っぽい。乃梨子もまた、顎を伝つたよだれで胸元まで濡らしていた。

乃梨子も顔を拭おうとすると、志摩子さんの手がそれを制し、口元をペロリとなめ上げた。

「レモンの味がするわ」

志摩子さんは小さく笑つて、小犬のように顔をペロペロとなめ回した。乃梨子の肩を抱き寄せる、よだれの流れ落ちた道筋に沿つて首筋から鎖骨へとなめ取つていく。肌の上を舌先が滑るこそばゆい刺激が、さざ波のようにざわざわと全身へ広がる。舌先が鎖骨から胸の谷間までたどり着いたときには、乃梨子のシンプルなデザインのブラは肩から滑り落ちて、控えめのバストが露になっていた。

乃梨子は志摩子さんに導かれるままに椅子に浅く腰掛けた。身に付けているのはショーツ一枚きり。少し腰を浮かすと、志摩子さんがショーツに指を掛けて足から抜き取つた。

いよいよ真つ裸になつてしまった乃梨子は、自

分でも顔が紅潮して行くのを感じた。びたりと合ませた膝に、志摩子さんの手がそつと触れる。覚悟を決めて導かれるままに足を開けば、うっすらと毛に覆われた恥丘が顔を出す。志摩子はその中心を穿つ谷間にそつと指を這わせた。

指が動くたびに、乃梨子の身体は電気が走つたかのようにピクツと震える。

「んっ……あっ……」

「乃梨子は他人に触られるのは始めて？」

「だって……見せるのも……初めて……あんっ」

「良かった。私が『初めての人』なのね」

志摩子さんは粘液で潤んだ谷間を指で押し開き、充血して膨らんだ蕾にキスをした。

「……んあぁっ……あぁっ！」

「あら、乃梨子は随分と敏感なのね？」

「し、志摩子さん、それは反則……ああん！」

乃梨子は舌先がちゃんと触れただけで全身をうねらせて悶えた。志摩子さんは軽く吸つたり舌で転がしたりしてもあそぶ。乃梨子は椅子の背を両手で掴み、のたうつ体を抑え込んで必死に耐えようとしたが、津波のように押し寄せる快感にたちまち登り詰めてしまった。

「あはっ……んっ……あっ……あぁあーっ!!」

乃梨子は絶叫とともに、全身をびくびくと痙攣させて絶頂に達した。

やがて乃梨子の全身を支配していた緊張が解け、椅子の背にぐつたりともたれかかった。快感の津波が引くと、今まで気づかなかつた小

さな刺激が顔を出す。裸で居たから身体が冷えたのか？ それともお茶を飲み過ぎたのがいけなかったのだろうか？ しかし今の乃梨子には足を閉じる元氣すらない。弛みきつた筋肉は込み上げる圧力を抑えられず、ほどなく乃梨子の股間からは間欠泉が吹き上がった。

（——ああ、やってしまった。あとで掃除しなくちゃ）

それを見ていた志摩子さんの様子がおかしい。乃梨子の股間から放物線を描く水流を両手で受け止め、恍惚とした表情を浮かべた。

（うっ、また何かフラッシュバックしてる!?）

さらに信じがたいことに、なんと志摩子さんについては股間に唇を寄せて喉を潤し始めたのだ。

一度始めてしまったものは止まらない。乃梨子には、柔らかい唇の中に飛び込む黄色い液体が、さも美味しそうにコクコクと飲み下されて行く様子を見守る以外に術が無かった。

乃梨子は常軌を逸した異常な光景に耐えられなくなつて手で顔を隠した。しかし室内に立ち込めた臭気と、ジョボジョボと響く音は遮りようがない。乃梨子は羞恥のあまり気が狂うのではないかと思つた。

やがて膀胱の圧力がなくなり、そつと目を開けてみると、志摩子さんは黄色い液体に塗れた惨めな格好で呆然と座り込んでいた。目に写るその姿はやがてぐにやりと歪んだ。乃梨子は目頭から溢れ出た涙を感じながら、自己嫌悪に押し潰されて泣いた。

「乃梨子、泣いているの？ ……ごめんさい、私がおかしな事をしたせいよね」

酷い目に遭わせてしまった志摩子さんに謝られてますます感情の行き場を失い、声を出して泣き始めてしまった。もし裸でなかったら、耐え切れずに外へ飛び出していたかもしれない。

泣きすぎて頭がぼんやりとする。志摩子さんは乃梨子が落ち着くの見計らつて、優しく語り掛けた。

「おかげで判つた事があるのよ。記憶の中で呼ばれたの、『ひさこさん』って」

その名前は心当たりがある。乃梨子は鼻をすすりながら答えた。

「……祈念碑の名前に、たしか『白河久子』って」
「突然の不幸を信じられないまま、彷徨つていらつしたのかわ。きつと、深く結ばれた姉妹だつたのでしょね」

志摩子さんは、久子さんと妹の物語を語つて聞かせた。二人の苦しいながらも幸せな日々は、久子さんの死によって突然断ち切られた。迷える魂は天に召されることなく、リリアンに留まり続けてきたのだという。

志摩子さんが言うには、名前を思い出したとたんに、全ての記憶が鮮明に蘇つたということだつた。（ちなみに乃梨子の粗相と結びついた記憶については語られなかった。さすがに湧き水の思ひ出か何かだと思いたいけど……）

「ね、乃梨子のおかげよ。だから、元氣を出して」

乃梨子の顔へ伸ばしかけた手がぴたりと止まる。

「あら、まず手を洗わなくちゃだめよね？」
ふつと緊張が緩んで、二人は笑い合つた。

志摩子さんが顔や手を洗っている間に、乃梨子は古新聞を使って床にできた水溜りを片付けた。途中から志摩子さんが飲み込んでしまったこともあつて、染みが残るほどでは無さそうだった。

「そういえば、その『誰か』……『久子さん』はもう落ち着いたの？」

「ええ、すっかり落ち着いたわ。というか、今はもう久子さんの存在を感じないの。記憶がはつきりして自分が何者か分かつたから、縁のある人のところへ旅立つたのでないかしら」

「ふーん。人助けになつたのなら、良いのかな？」
そう思つたらちよつとだけ心が軽くなつた。

床掃除を終えて、乃梨子が流して汚れた手を洗っていると、その隣で志摩子さんがするすると下着を脱ぎ始めた。

「うわっ、どうしちゃつたの？」

「どうしたのつて、下着も洗わなくちゃならないでしょ？ 体も拭きたいし」

はい、そうでした。汚れたのは私のせいです。
「じゃ、私が志摩子さんの体を拭いてあげる」

タオルをよく絞り、首から下へと拭いていく。もちろん、マリア様に誓つてやましい気持ちなど無い——と言いたいところだけれど、裸で向き合っているとやっぱりドキドキする。白い肌に

ふわふわの髪の毛の志摩子さんの裸に触れていると、なんだか人形を相手にいけない遊びをしているような気持ちになつてくるのだ。

全身くまなく拭いて、残すは股の下だけ。禁断の領域に踏み込む緊張と興奮で、思わずごくりと生唾を飲み込む。

「……触つてもいいわよ」

志摩子さんは乃梨子の悶々とする気持ちを見抜いているかのようだ。

「そ、それじゃ、ちよつと失礼して……」

いよいよ触れようとした、その時。

どん、どん、どん。

突然ドアが叩かれたので、二人は心臓が飛び出るほどびくりした。

『カギ閉まつてるけど、誰かいるの?』

外から聞こえる男性の声は守衛さんだ。黙っているのは逆にまずい。

「は、はーいっ!」

『あー、藤堂さん? 忙しいトコ悪いんだけど、閉門時間過ぎてつからさ、早く出てね』

体は大きいが優しいおじさんで、こんな時も多い飛ばしたりしない。他校生徒の立ち入りが多い山百合会のメンバーとは顔なじみだ。

「すみません、着替え終わるまで待つてください」

『あーそうなの? ここ最後で、校舎も警備入れちやうからさ。表で待つてつから、早くしてね』

「はいっ!」

志摩子さんの身体を拭いた後だったのは不幸中の幸いだった。急いで制服を着て、部屋の中を片

付ける。水分の染み込んだ椅子は部屋の隅に寄せ、明日にでも倉庫の分と入れ替えよう。汚れたタオルや床を掃除するのに使った古新聞はゴミ袋にまとめる。匂いが籠るといけないから玄関先に出しておいて、明日の朝は早めに来て捨てに行こう。こうして、五分と掛からずに下校の準備が完了した。

薔薇の館の玄関を開けると、守衛さんが待つていた。

「遅くまでお疲れ様。はい、施錠点検ヨシ」

玄関に鍵が掛かったのを確認すると、守衛さんは校舎の方へ歩き出した。ところが、志摩子さんは薔薇の館の前から動こうとしない。

「どうしたの」

志摩子さんは人差し指を立てて制して、小声で話しかける。

(下着を着けて無いのよ)

(……えーっ!)

(水で洗つてそのままだったから……。アイロンがあるから大丈夫だと思つてただけ)

たしかに、濡れた下着を着けたら制服にも水が染みるからNGだ。仕方なくビニール袋に詰め込んでカバンに収めたから、ワンピースの制服の下は素っ裸というわけ。選択肢が他に無かつたとは言え、その状態で外を歩くのは恥ずかしい。

「シヨーツは正門の向かいのコンビニでも売つて

るから、今だけ我慢して。まず正門まで行こう」

本当はそのコンビニに売っているかどうかなんて知らないが、まずは正門から出るのが優先だ。

なんとか説得して二人は歩き始めた。

二人は校舎の通用口に中から鍵を掛ける。守衛さんは外を回つて昇降口に回るはずだ。

廊下の電気を消して下足室に近づくと、遠回りしたはずの守衛さんは既に昇降口で待つていた。

「すぐに警備入れつから、急いで」

急かされて二人とも小走りになる。リリアンの制服はロングスカートだからその程度で捲くれ上がったりはしないのだけれど、志摩子さんの制服の裾が翻るたびに気が気でなかった。

4

守衛さんに見送られて正門から出ると、ちょうどM駅に向かうバスが滑り込んで来たところだった。昼間は本数の多い路線だが、さすがに閉門時間を過ぎた時間帯ともなれば次まで長く待たされる。先に乃梨子がバスに駆け寄り、待つてもらっている間に志摩子が追いついた。

定期券を見せてバスに乗り、動き始めたところで志摩子さんがポツリと一言。

「コンビニに行き損ねちゃったわ」

「あっ!」

乗ってしまったものは仕方ない。下着は駅ビルで探すことにしよう。

二人は後ろの方の席に並んで座つた。黙つているのも気まずいが、今日の出来事を蒸し返すのもちよつと。

「そういえば、K駅の前にできた喫茶店なんだけ

ど……」

志摩子さんの反応がないので、横を見れば顔を耳まで真っ赤に染めている。バスの中で事が起きたら一大事なので、先回りして聞いてみる。

「志摩子さん、どうしたの？また何か感じるの？」

「それは大丈夫なだけ……ブラがないから、バスが揺れるたびに胸の先が擦れるのよ」

はい、ノーブラならそういう事もあるのでしょう。

「それで、ショーツも着けて無いんだなと意識してしまつたら、何だか疼いてしょうがなくて」

そうですか、できれば変態に目覚めないで頂きたいのですが。

「そういうえば、さつきは守衛さんが来て触つてもらえないままだったなつて」

それはちよつと心残りがありますけど。

「だから、お願い」

志摩子さんは乃梨子の右手を掴み、

「……触つて」

スカートの中へと導いた。

周囲には他の乗客も乗っている。周囲に悟られること無く愛を交わすスリルと背徳感。乃梨子の鼓動はますます早くなり、緊張と興奮で頭がぐらぐらした。

まずは深呼吸。まずは志摩子さんの下腹部を指で探つて窪みの位置を確かめる。椅子との隙間に滑り込ますように指を這わせていくと、襞の間は粘液でぬめっていた。

「ふう……ん、んっ……」

志摩子さんの息は次第に荒くなってきたが、まだ周囲に悟られるほどではないだろう。中指を突き立てて軽く力を入れると、志摩子さんの中にずるりと飲み込まれた。指を出し入れするとチュクチュクといやらしい音を奏でる。

志摩子さんは下唇を噛んでこらえている。その表情が乃梨子の嗜虐心に油を注ぐ。差し入れた中指をぐつと曲げると、内壁に力をかけた。

「んっ……ひああっ!!」

やりすぎた！慌てて手を引つ込めて周囲を見回せば、皆がこちらの様子を伺っている。志摩子さんの嬌声は車内に響き渡ってしまったらしい。特に斜め前のおばさんの突き刺すような視線が痛い。

「大丈夫？どこか痛いのか？」

「ご、ごめんなさい。何でもないわ」

我ながら白々しい演技に冷や汗が出る。前の方に座るおじさんは横目でチラチラと様子を伺っているし、先程のおばさんはますます不信心もあらわにこちらを見ている。ここは逃げるのが上策というところで、次のバス停も確認せずに降車ボタンを押す。

ピーッ。

『次、停まります』

無感情な電子音声がそう宣言する。ランプが赤く灯つたのを確かめてボタンを離すと、指先が粘つてすつと糸を引いた。

今すぐにも降りたいと願う二人を乗せたまま、バスは走り続ける。無情にも、バスは赤信号に阻まれ、騒がしいエンジンがぴたりと止まった。密閉された車内は静まり返り、普段気にならない微細な音さえ大きく聞こえる。携帯電話のボタンを押す音、靴底と床が擦れる音、体重移動で椅子のクッションが軋む音。——前の信号で停まつた時には、志摩子さんの息遣いや乃梨子の指先が奏でる音もそこに加わっていたはずだ、と思い当たった。

(舞い上がって、何て事を)

乃梨子には、この時間が果てしなく長く感じられた。

数十秒経つてようやくエンジンが唸りを上げ、ようやくドアが開くと二人は好奇の視線から逃げるようにステップを駆け降りた。

バスが走り去るのを見送って、二人はベンチに並んで座る。

「ごめんなさい」

「私こそ、ごめんなさい」

再び沈黙。志摩子さんはうつむき加減だ。

(さつきから失敗ばかり……何とかしなくちゃ) 落ち込んだ心を奮い立たせて、頭を働かせる。

降り立ったバス停は、リアンからあまり離れていない場所だった。M駅行きのバスは十分間隔くらいのはず。M駅へ向かって曲がる交差点より手前なので、時刻表通りならK駅行きも五分と待たずに来るようだ。

さすがに今は志摩子さんも素に戻っているし、

駅までは大丈夫だろう。だがその先はどうするべきだろうか？

5

志摩子さんは感情が安定してきたとはいえず、さつきから寸止めで悶々としたままのはず。先ずはどこかで昂ぶりを解消してあげよう。少なくとも、今の『発情』という表現がぴったりの状態よりは落ち付く……と期待したい。その上でせめて日駅までは乃梨子も付き添って送り届けよう。

問題は人目に付かない安全な場所がどこにあるかだ。駅やデパートのトイレで騒げば、たちまち警備員が飛んでくる。まさか制服を着た女子高校生がホテルで休憩して訳には行かないし。

考えているうちに近づいてきたK駅行きのバスを見て、乃梨子は一つの回答に気づいた。ベストには程遠いが、バスの中よりはマシだろう。

「志摩子さん、K駅まで付き合ってもらっても良い？」

「いいわよ。乗りましょう」

K駅行きのバスは思いのほか乗客が多く、二人並んだ席は空いていなかった。二人は出口に近い手すりにつかまって並んで立った。

乃梨子はふと沸いた疑問をぶつけてみた。

「志摩子さん。さつきK駅に行こうって言った時、何で理由も聞かずに賛成したの？」

「だって、私のために考えてくれたのでしょうか？ 反対する理由が無いわ」

志摩子さんは全面的に信用してくれているのだ。乃梨子はその言葉がうれしくて、志摩子さんの手をギュッと握り締めた。

新しくできた喫茶店の話をしている間に、二人に乗せたバスはK駅北口のバスターミナルに到着した。駅ビルに寄って下着とタオルを買い、南口の公園へ着くころには、暗い空からは雨粒がぼつりぼつりと落ち始めていた。

公園内の人影はまばらで、ベンチに座ったカッブルも雨に気付いて帰り支度をしていた。休日には家族やカッブルでにぎわうボート池も今はしんと静まり返り、灰色の水面に雨粒が落ちるたび小さな波紋が広がる。人目に付かない場所を求めて歩くうちに、大粒の雨がバラバラと音を立てて地面を叩き始めた。

雨は瞬く間に土砂降りになってしまった。二人は肩を濡らしながら走り、少し奥まった東屋に駆け込んだ。

「土砂降りになっちゃったね」

「折り畳み傘では役に立たないわね。……小降りになるまでここで待ちましょう」

しかし、雨はますます激しさを増していく。東屋の中は屋根を叩く雨音に包まれ、溢れた雨水が道を小川に変えていった。

二人のいる東屋は遊歩道より一段高い丘の上で、公園の外からは木立に遮られていた。激しい雨は人を遠ざけ、音もかき消されるだろう。時間も遅いし、このまま無為に時間を過ごすより……（でも、志摩子さんは何て言うかな？）

そう思いながら振り向くと、街灯の青白い光に照らされた横顔が、闇の中に白く浮かび上がっている。憂いを帯びたその表情はドキリとするほど妖しく艶かしい。

（この人の全てを手に入れたい）

乃梨子の心の中に芽生えた欲情はたちまち押さえ切れないほど大きく膨らんでいった。乃梨子は志摩子さんの肩を抱き寄せ、耳元に顔を寄せて囁いた。

「ね……エッチしよう」

志摩子さんは一瞬目を見開き、顔を赤らめ、やがてコクリとうなずいた。

軽いキスを交わしてから、乃梨子は背中に回した両手をセーラーカラーに沿って胸元へ運び、制服のしわを延ばすように腋の下へ滑らせた。リリアンの制服の厚い生地でも、こうして少し引つ張ると胸の先端が僅かに突き出して見えた。

「志摩子さん、駅からずっと乳首が立ってたよ」

「……えっ！」

志摩子さんは軽く驚きの声を上げた。

乃梨子は志摩子さんの柔らかな双丘をセーラー服の上からこね回しながら囁き続ける。

「下着を着けないで人込みを歩くのが気持ちよかったです？ それとも乳首が擦れて感じてた？」

「そっ……そんな……こと」

志摩子さんは先程立ち寄った駅ビルでの状況を思い出して急に恥ずかしくなったのか、耳まで真っ赤になる。整った顔を少し歪めて、恥じらう表情もたまらない。

「制服の中も触って欲しいんでしょ？」

乃梨子は跪くと、三つ折りの靴下からスラリと伸びる細い足首に手を置き、両脚をロングスカートの中へ向かって撫で上げていった。腰骨の上まできたらUターンさせて、背中から続く滑らかな曲面へと手を伸ばす。

「すごい。志摩子さんのお尻って、ツルツルで柔らかくて指が吸い付くよ」

志摩子さんのお肌の滑らかさに改めて感動する。お尻の柔らかな感触をひとしきり楽しんでから、背中から胸へ向かって撫で上げた。

「下着がないから、肌に触ったままどこまでもいけちゃうね」

ワンピースのセーラー服の中をお尻から胸までまんべんなく撫で回す。

「やつ……あつ！」

ふわふわのバストをもてあそぶうちに、志摩子さんの吐息は次第に熱を帯びて行き、肌もしつとり汗ばんできた。そろそろ頃合だろう。

「ね、志摩子さん。柱に寄りかかってみて」

「え？」

志摩子さんは訳も分からないまま、身長を測るようにまっすぐ柱の前に立った。

「えーと、もつと両足を広げて、前に出して」

「こ、こうかしら？」

「もう少し腰を落として。うん、オッケー」

言われるままに調整した結果は、いわゆる『空気椅子』をガニ股に開いたような、少し恥ずかしい格好になった。

乃梨子が「見せて」と言うと、志摩子さんはためらいながらもスカートの裾をすつと持ち上げた。ペチコートをはいていない黒いスカートの中で、水銀灯に照らされた下肢の白さが際立ち、その中心から滴り落ちる粘液が透明の糸を引いてきらきらと輝いていた。

「あはっ、いやらしい蜜が溢れてる」

裂け目を縁取るヒダは充血して広がり、粘液が溢れていた。裂け目に指を沿わせると、志摩子さんの体がびくりと小さく揺れる。乃梨子は粘液をすくい取って指に良く絡ませ、志摩子さんの鼻先でこれ見よがしにクチュクチュと粘らせて見せた。

「知らなかった。志摩子さんって、本当は凄くエツチなんだ」

志摩子さんが眉を顰めるのにも構わず、湿った指先を口に含んで舐つてみた。

「ん……、志摩子さんの味は……酸味があつて、少ししょっぱいね」

乃梨子の解説を聞かされる志摩子さんの顔は恥ずかしさで赤みを増す。

「……乃梨子の意地悪」

少し口を尖らせ、美しい顔を歪めて恥らう表情もまた、乃梨子にサディスティックな快樂をもたらすのだった。

「もつと気持ちよくしてあげるからね」

乃梨子は唾液と粘液でヌルヌルとぬめる指先を洞門にあてがった。

「それじゃ、入るよ」

乙女の証を傷つけないように慎重に滑り込ませていく。やがて温かな胎内に中指の付け根まですつぽりと呑み込まれた。

「あふう……」

志摩子さんの口から甘いため息がこぼれる。

反応を確かめながら爪を立てないように慎重にあたりで感じるはず。

「ひゃうっ！」

指先が敏感な部分に的中し、志摩子さんは体を大きくうねらせた。ポイントを探り当てても、自分自身を触るのと違って加減が難しい。探り当てたポイントを中心に少し弱めに刺激する。

「少しづつ強くするから、気持ち良い強さになったらいつて」

「んっ……、もうすこし強く、強くっ……、そう、いい……いいわっ」

志摩子さんは乃梨子の右手が生み出すリズムカ的な刺激に身を委ねた。

異物を受け入れて緊張していた隘路は次第に揉みほぐされていった。乃梨子は弛んだ洞穴に薬指も挿し入れ、二本の指で攻め立てた。

志摩子さんは目を閉じて恍惚とした表情を浮かべていた。

「んっ……んっ……んっ……」

指が入りするたび、チュクチュクと響く淫靡な旋律に、喉元で発する小さな嬌声の歌が絡み合う。

志摩子さんの足の間にしゃがみ込み、快感を引

き出すことに熱中していた乃梨子の鼻の上に何か
が滴り落ちた。見上げれば、半開きになった唇か
ら唾液が流れ落ちていた。快楽におぼれる志摩子
さんは、たくし上げたスカートの下から両手を差
し入れ、自らの両胸の乳房をこね回している。

美しい人が色情に狂う姿は妖艶で、官能的な美
しさがあつた。貞淑な聖女が墮落していく様子に
少しの罪悪感を覚えつつも、大きな満足を感じた。
乃梨子はいよいよ仕上げに掛かった。空いてい
る左手で蓄の皮を剥き、艶やかな真珠の粒に口付
けし、舌で刺激を加える。

「あつ……んつ……ああつ！」

押し寄せる快感が一気に強まり、志摩子さんは
思わず歓喜の声を漏らした。乃梨子は頂上へ向か
い中と外の両方から攻め立てる。陥落は間近だ。

「ああつ……乃梨子……のりこっ!!」

感極まつて両手で乃梨子の頭を抱え込むと、全
身を大きく身震いさせて果てた。

6

乃梨子がマンションに帰り着くと、董子さんは
ソファで眠り込んでいた。あまりに気持ちよさ
そうに寝ていたので、起こさないようにそつと自
室へ入る。

それにしても長い一日だった。

別れ際の志摩子さんの満足げな笑顔を思い出し
て、ちよつと顔が緩む。

「リコ、帰ってるの？」

「はっ……ははいっ！」

いつの間にか起きたのか、リビングの方から董子
さんの足音が近づいてくる。

「あんまり帰りが遅いから心配したよ。この時期、
忙しいのは判るけど、遅くなる時は忘れずに連絡
をちょうだい」

「……ごめんなさい」

慌てて着替えてキッチンに向かうと、一人分の
夕食が並んでいた。急に食欲がわいてきて、お腹
がぐうと鳴る。

「すぐに準備できるからさつさと手を洗っておい
で。私は待つてられないから、先に食べちゃった
わよ」

「ああ。董子さんは待ち疲れたわけじゃなくて、
おなか一杯で居眠りしてたんだ」

「あらまあ、失礼な。可愛くないわねーっ！」

丸めたラップが洗面台へと歩く乃梨子の後頭部
に当たった。相変わらずコントロールはバツチリ
だ。

乃梨子は手と顔——特に右手の指先は爪の間ま
で念入りに洗ってから、ようやく遅い夕食にあり
ついた。

「ケーキもあるから、少しお腹を空けときなさい
よ」

乃梨子が食事を終えるころには、キッチンの中
にはダージリンの香りがふわりと漂っていた。董
子さんはティーポットを食卓の真ん中に置くと、
乃梨子の向かいに座った。

「董子さん、さつきから何ニヤニヤしてるの？」

「リコ、首にキスマークが付いてる」

「……げっ」

「ウ・ソ。鎌かけただけ。でも心当たりアリ、な
んでしょ。ま、リコのお相手は男じゃないから安
心だけどね」

董子さんは何もかもお見通しして感じた。
ティーカップに紅茶を注ぎながら話を続ける。

「ふふん、人生の大先輩を侮るんじゃないわよ。
ま、若いうちに冒険しておきなさい」

てつきり諫められるのかと思つたら、何だか逆
に応援されてしまった感じだ。

乃梨子は、茶碗を流しに下げてから、メー
ルパーラーの袋からシフォンケーキを取り出し、
ケーキ皿に二人分取り分けた。

董子さんはシフォンケーキを半分食べたところ
で手を止めて、少し改まった口調で言った。

「リコには感謝してるわよ。私にとって、リコと
志摩子ちゃんが幸せな姉妹であることは一番の慰
めだわ。……そういえばあの話はしたかな？」

董子さんは目を細めてくすりと笑った。
「私のお姉様も、白薔薇さまって呼ばれてたのよ」

この話には後日談がある。

後日談その一。

武蔵野の空襲が始まった日に合わせた『平和祈
念ミサ』が執り行われ、これに併せて祈念碑も正
式に再設置される運びとなった。ミサには祈念碑

に名前の刻まれた犠牲者の縁故者も数多く集まった。参列者の中には二条葦子の姿もあったという。そもそも撤去されたままになった経緯は明らかでないが、どうも戦後誕生した新興宗教を信奉する遺族との間でひと悶着あったらしい。しかしそれも遠い過去の話だ。

再設置に学園長のシスター・上村は二つ返事でOKを出し、「喜ばしいこと」とまで言い切ったとそうだ。

後日談その二。

次の週の放課後のこと。黄薔薇姉妹は部活があるし、祥子さまは用事があつて早々に帰宅するという。残りの三人は、薔薇の館に行つて簡単な事務作業だけ片付けることにした。

「ねえ志摩子さん、用事が済んだらさっさと帰ろう？」

「そうね、今日は早く帰りましょう」

薔薇の館の階段を気だるそうにギシギシと上る祐巳さんの後を、志摩子さんは楽しげな様子で軽

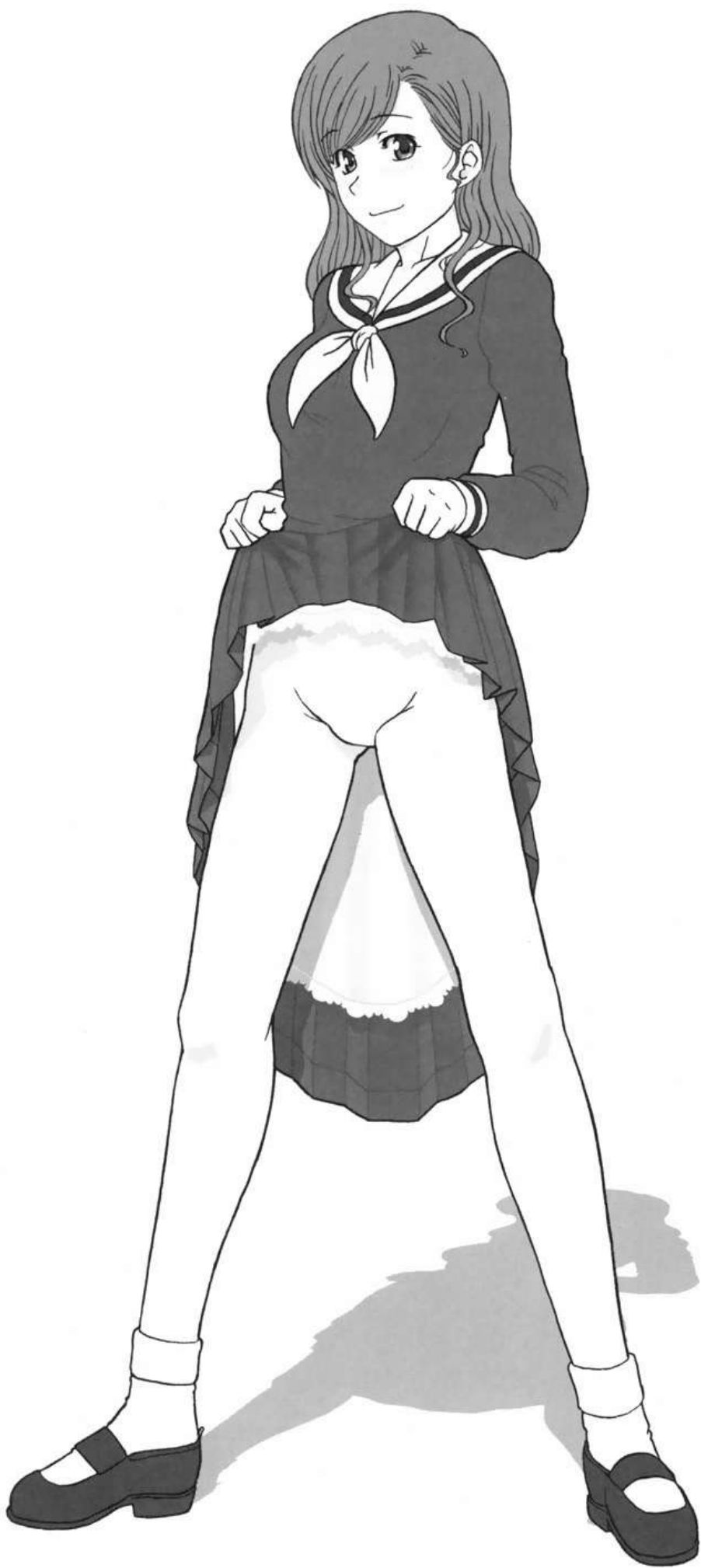
やかに上がって行く。踊り場に差し掛かると、階段の下の乃梨子に見せ付けるようにくるりとターンした。スカートが腰の高さまでふわりと舞い上がって、パンツが見え……ない？

え——っ、穿いてない！

志摩子さんは階段の下へ戻り、あまりの事に唾然とする乃梨子にそつと耳打ちした。

「今日は私たちだけで『薔薇の館の掃除』をしてから帰りましょう。祐巳さんには内緒よ？」

はっ……、はいっ！ 喜んで！



空襲に散った桜

昭和二十年四月七日、土曜日。

朝陽に浮かび上がった桜の木々が、穏やかな風にさやさやと揺れている。春の訪れとともに、リアンのキャンパスは桜色に染まっていた。

リアンこと山百合女学院は、明治以来の伝統を持つ名門女学校である。かつての『リアン女子学院高等女学部』は、敵性語排斥運動の高まりを受けて、止むなく外国語を使わない校名に改められていた。それでも女生徒たちは、母校への敬愛をこめて今もリアンと呼ぶ。

学園のシンボルである本校舎の三角屋根は、いつもと変わらない姿で満開の桜を見下ろしている。キャンパスの中央に立つ本校舎は幸いにも空襲の被害を免れていたが、空襲に備えて窓に貼られたテープや、ステンドグラスの代わりに打ち付けられた板が痛々しい。女生徒たちのいない校舎の中はがらんとしていた。

校舎の玄関から歩み出た若き修道女、上村佐織は、講堂の裏まで来ると桜の大木を見上げた。この桜を見ていると、懐かしい日々思い出が次々と甦ってくるのだった。

*

女学校に入学した日、リアンの桜は八部咲きだった。入学式には舶来品のカメラを持った父兄

が沢山来ていて、父は「さすがは名門」と感心しきりだった。式の後、その中の一人にカメラを渡し、家族三人揃った写真を撮った。

この時の写真は菓子箱に大事にしまっておいたのだが、引越しの荷物に紛れて箱ごと失くなってしまった。

祖父が亡くなると、両親は本郷の実家へ引越して家を継ぎ、私は寄宿舎に入った。そして翌年の桜の咲く頃、私たちは運命的な出会いをした。彼女の名は春日せい子という。二人の夢のような日々の最後には、悲しい別離が待ち受けていた。

修道院に入った日、リアンの桜は散り始めていた。最愛の人を失った絶望と後悔の日々から私を救い上げたのは聖書だった。卒業してすぐに、猛反対する両親を押し切って修道女になった。

父には絶縁されたも同然だったが、安否を気遣う母からの電話が絶えることは無かった。毎週土曜日、朝の一時課と三時課の間に本校舎の事務室で待っていると、いつもの時間にベルが鳴る。それが家族を繋ぐ唯一の絆だった。

しかし三月十日の朝は、いつもの時間を過ぎても電話は掛かってこなかった。出勤した事務員から、都心が空襲で酷い事になっていると聞き、慌てて本郷の実家へ駆けつけた。

辺りは一面の焼け野原だった。焼け焦げた瓦礫の中から、真っ黒に煤けた菓子

箱が顔を出していた。缶を開けると、入学の日に両親と撮った写真が焼けずに残っていた。私は写真を胸に泣くことしかできなかった。

そして大空襲の日から四週間が過ぎ、今年も桜の季節を迎えた。今日も電話は鳴らなかつた。両親の安否は未だに判らないままだ。

*

さて、聖務日課の待つ修道院へ戻ろう。大きく深呼吸をして振り返ると、遠い桜並木の下を二人の少女が並んで歩いてくるのが目に入った。大きな荷物を抱えた少女はどこか遠くへと旅立つのだろう。

この辺りは昨年の十一月から幾度となく空襲に曝されてきた。リアンのすぐ側ある中島飛行機のエンジン工場（武蔵製作所）が空襲の目標にされていたからだ。それでも攻撃が軍需工場に集中していた間は市民も一致団結して耐えてきたのだが、下町を焼け野原にした大空襲を境にして疎開する人が増えたように感じる。

桜が咲き始めてからというもの、キャンパスのそこかしこで乙女たちの『別れの儀式』を目にするようになった。頭上には敵機が飛び交い、本土決戦・一億玉碎などと恐ろしいスローガンの叫ばれる昨今である。生きて再び会えるかわからないのなら、せめて美しくお別れしたいと誰しも思うのだろう。

聞いた話では、自分の写真や身の回りの物を守りとして持たせるのが流行であるとか。もちろん、二人の親密さを象徴するロザリオも忘れてはならない。姉妹制度とロザリオの授受は、長く受け継がれたリアンの伝統だ。憧れの人が遠く旅立つ前に、秘めた思いを打ち明けたい、姉妹の契りを交わしたい、と思うのは自然なことだった。

つい先日、生徒が二人連れだつてロザリオを祝福してもらいに来ていた。しかし真面目な神父さまは、ロザリオは首から下げる物ではないと注意することも忘れない。嗚呼、少女たちの淡い恋心を前にして、何と無粋な指摘だろうか！
(まあ、顧みられることもないのだけれど)

「ごきげんよう、シスター・上村」
「久子さん、ごきげんよう。貴女がいなくなるとリアンも寂しくなるわ」

旅行カバンを抱えた色白のお姫様は白河久子さん。華族のご令嬢で、全生徒の憧れるお姉様だ。白河家の子女は那須の別邸へ疎開するのだという。昨年の暮れから疎開の話は出ていたが、華族ともなるとそう簡単に引越す訳にもいかなかったらしい。昔はよく白河家のお屋敷にも遊びに行つた仲だから、ついつい話に花が咲く。

「ねえ久子さん、まだかかるの？」
「少しお待ちなさい。慌てなくても時間はあるの
でしょう？」

「だつてえ」
久子さんの腕にぶら下がつて腐れているの

が、妹の董子さん。お姫様の心を射止めたおっぱ頭のシンデレラだ。お姉様を取られまいと頑張っているのが可愛らしい。

二人は以前から親しくしていたけれど、正式に姉妹になつたのはごく最近のことだ。

「ふふ、泣き虫ひーちゃんもすっかりお姉様らしくなつたわね。いいわよ董子さん、お邪魔虫はこれで退散するから」

「す、すみません」

「それでは失礼します。行こう、久子さん」

董子さんは軽く頭を下げると、挨拶もそこそこ
に久子さんを引張つて歩きだした。

「私からも餞別があるのよ。後でお寄りなさい」

久子さんは何度も振り返り頭を下げながら遠ざかつて行つた。



満開の桜の下で交わした初めてのキスは、嬉しくて、切なくて、そしてちょっと照れくさかつた。

久子さんに贈り物をしたかつたのだけれど、相手は華族のお嬢様。戦争中とはいえ欲しいものは手に入るはず。配給切符がなければ食べ物も買えない我々とは住む世界が違うのだ。

いくら考えても気の利いた贈り物が思いつかなくて、悩んだ挙句に、

「お別れのキッスを」

と言つてしまつたのだ。

久子さんは耳まで赤く染めながらも、董子のお願いを聞いてくれた。目を閉じた久子さんに、董子は唇が触れるか触れないかの軽いキスをした。

「今度は私からのプレゼントね」

久子さんはそう言つて、荷物からドロップキャンディを取り出して自分の口に一つ含んだ。

言われるままに董子が口をあけると、久子さんの柔らかい唇がすつと合わさつて、キャンディを乗せた舌が滑り込んだ。二人の舌は一つのキャンディを転がしながらねつとりと絡み合い、交じり合つたレモン味の唾液が喉元を滑り落ちていく。

こうして董子はキスが『気持ちのいいもの』だ
という事をこの時はじめて知つたのである。

キャンディが溶けて無くなつて、少しあごが痺れてきたころ、ようやく二人の唇は離れた。

「楽しいけれど、口の周りがべとべとになるわね」

久子さんはそう言つて屈託なく笑つた。

「さて、汽車の時間もあるし、そろそろ行くわね」
別れがたくてぎゅつと抱き付くと、久子さんもその柔らかい腕を董子の背中に回した。

こうして抱きしめられているだけで身も心もとろけるようだった。この人と一緒にいると、何でこんな胸が高鳴るんだろう。このまま時間が止まつてしまえばいいのに、と思わずには居られなかつた。

つかの間の甘い時間は、湧き上がったサイレンの音に切り裂かれた。あたりが俄に暗くなる。空を仰げば、まだ空襲警報が出たばかりだというの

に、何十機もの爆撃機が現れて空を覆っているではないか。

二人は手に手を取って走り出していた。校舎の間の道を駆け抜け、校庭の側の松林まで行けば生徒用の防空壕があるはずだ。ずしん、ずしんと地響きがあるたびに校舎の窓がびりびりと揺れる。校舎の影で見えないが、爆撃が近づいているに違いない。

図書館の角を曲がってようやく校庭が見えたとき、その手前の体育倉庫が轟音とともに粉微塵に吹き飛んだ。慌てて反対へ戻りかけると、すぐ先の木造校舎の壁が不自然に波打ち、内側から炸裂した。間を空けずに三回・四回と立て続けに爆発が起こり、たまたま頭を抱えてしゃがみ込んだ。

ようやく爆発が収まって立ち上がろうとすると、頭上からばらばらと落ちてくる物がある。見上げれば、二階建ての図書館の壁に大きな亀裂が入って倒れてくるのではないか。頭では逃げなくちゃと思うのに、足がすくんで動けない。

激しい動悸がする。どうしよう久子さん。

……久さんは!?

「危ない！」

それは久さんの声だった。不意に突き飛ばされた董子は、よろけるように数歩進んで倒れる。次の瞬間、地響きとともに煉瓦の壁が崩れ落ちた。

信じられないことに、董子は傷一つ負っていなかった。ハッと我に返って久さんの姿を探したが、もうもうと立ち上がった土煙に遮られて何も見えはしなかった。



防空壕から這い出した佐織は太陽の眩しさに目を細めた。防空壕の中は雨水が溜まって泥沼のようだし、空気は湿ってかび臭く、居心地は最悪。危険が去れば長居は無用だ。

見回すと至る所から黒煙が上がっている。街を焼き尽くすような大火災は発生していないようだが、木造校舎に火がつけばバケツリレーなどではとても消しきれぬものでない。

その時、一人の生徒が息せききって飛び込んで来た。顔は涙でぐちゃぐちゃだ。

「久さんが！ 久さんが！」

名前を連呼しただけだが、それで十分だった。

「久さんが怪我をしたの？ そうなのね」

董さんはうなずくと、佐織の手を掴んで一直線に走りだした。

久さんは女性二人で助けられるような状態では無かった。胸から下は瓦礫の山に押し潰され、染み出た血が乾いた土を赤黒く染めていた。意識は無く、呼吸も浅い。

「どうしよう！ 久さんが死んじゃうよ！」

「落ち着きなさい！ 私はお医者さんと呼んでくるから、あなたは側に居てあげて」

コクリとうなずいた董子さんをそこに残して佐織は走った。キャンパスのあちこちで発生した火災でどこも人手は足りていなかったが、とにかく

人命優先で男手をかき集めた。電話が繋がらないので若い職員を病院へ送り出して、再び久さんの元へと駆け戻った。

それから三十分ほど掛かってようやく久さんは救い出され、担架の上に横たえられた。血と埃にまみれた久さんの顔を濡れたハンカチで拭くと、青白い顔に血の滲む唇だけが紅く鮮やかに浮き上がった。

董さんが手を強く握り締めて呼びかけると、久さんはうつつすらと目を開いた。

「お願い、お姉さま……呼んで」

董さんが震える声で「お姉さま」と呼ぶと、久さんは満足そうに微笑んで再び目を閉じた。

結局、それが最期の言葉になった。

白河久子は病院に運ばれたが、意識が戻らないまま翌日未明に亡くなった。遺骨は白河夫人の胸に抱えられて旅立ち、疎開先的那須で埋葬されたという。

「志摩子の此処に惚れた！」

という部分について是非語ってください

- ◆ 無印初登場時から好きでした。(や)
- ◆ 抱きしめると折れてしまいそうな可憐さ(月ノ原ととと)
- ◆ 全部です、全部。語り切れません。(抹茶閣下。)
- ◆ 全て。強いてあげるならおっきくではえてな (ry (miduki-s))
- ◆ 昔の悶々とした性格が可愛かったです。(最近はずっかり安定してしまいましたか)(賽子)
- ◆ 初期の一人で問題を抱え込んであつぷあつぷなっているところに惚れました。現在はそこを乗り越えた上で優しいところ、ですかね。芯の強さ、揺らぎない美しさを魅せてくれます。レディゴの天然ボケっぽい志摩子さんも好きです。(ちまる)
- ◆ 志摩子さん天使説(祐馬)
- ◆ 最初は完璧超人で何を考えているかわからないキャラだったのに原作で志摩子さん視点の話があって、実は中身がもろい普通の…むしろ普通より弱い子だとわかったときにドキュンとききました。ギャップ萌えてやつでしょうか(きのこ人間)
- ◆ 此処に、というより志摩子さんに惚れたシーンなんですけども。ウァレン後編の、館に一人で戻ってきて佐藤に出迎えられたシーンで一目惚れ。それまでは、正直マリみてにも志摩子さんにもそんなに執着してなかったのだけれど。後編が発売されてからしばらく、志摩子さんがわいいよ志摩子さんという言葉が頭から離れなかった。そんなわけで、私は主にあのシーンの志摩子さんに惚れた！という感じですね。(おおかみいぬ)
- ◆ 気が付いたら恋に落ちていたのでよくわかりません(相原)
- ◆ やはりほわほわした性格ですね、かつ芯の強さが垣間見えるあたりがとても、なんというかお母さんっぽい感じ?(ヤマグチT)
- ◆ ふわふわ髪(屢那)
- ◆ しっかりしてそうで実はうじうじしがちな所(笑)普段自分を抑えがちな分、気を許した人にだけ時折見せる強い感情がすごく印象的なんだと思います。(村矢)
- ◆ か、語りつくせない…！静さまで戦う決心をした際の志摩子さんの心の推移が個人的にぎゅっときます。(日和皐)
- ◆ お寺の娘でシスター志望、その背徳感。凛とした強さと、年相応の弱さのギャップ、甘え下手なところ。(〇わ)
- ◆ 「今後何があっても、私はあなたの妹になるつもりはありません。あなた以外の誰であっても同じです。私のお姉さまは、佐藤聖さまただ一人です」(神谷)

志摩子さん大好き！ アンケート

◎ 回答者数 24名 (男性14名：女性10名)

※ 誌面の都合により、回答に添えられたコメントから一部を抜粋編集して掲載しておりますのでご了承ください。

参加メンバーのみんなから寄せられた「志摩子好きが集まったら聞いてみたい質問」を、本誌執筆者の皆さんに答えてもらったぞ！もちろん、エロ志摩子さんを描いちゃうような人たちだから回答はかなり偏っているが、そこも含めて楽しんでほしい！（編集部）

志摩子さんのどこに一番魅力を感じますか？

| | | |
|------------|---|---|
| 容姿 | 8 | ・ふわふわ巻き毛(3) ・ビジュアル ・体 ・手首 ・目つき ・天使の笑顔 ・東洋と西洋の良いとこどりな所 |
| 性格 | 6 | ・不思議系と見せかけて、かなり天然 ・ストイック ・弱さと包容力 ・普段ボケていながらも、時々鋭い ・志摩子さんが志摩子さんである事 |
| 容姿と内面のギャップ | 5 | ・見た目ふわふわなのに凛とした強さ ・強烈に甘やかな容姿でありながら芯の強い面 ・一見ふわふわな感じだけど、現二年生の中では一番頼りになる |
| 雰囲気 | 2 | ・ふわふわしてるところ |
| 全て | 2 | ・全て(強いてあげるなら本人が自覚なく撒き散らすえろす) |
| その他 | 1 | ・実家が仏門 |

↑ふわふわの外見と、単に甘いだけでない内面の組み合わせが絶妙です。

能登麻美子さん以外で、志摩子さん役に合いそうな声優が思い浮かびますか？

- ・川澄綾子
- ・沢城みゆき
- ・島本須美
- ・田村ゆかり
- ・平野綾
- ・皆口裕子
- ・矢島晶子
- ・海月こすえ(マリドンの志摩子さん役の人)
- ・思い浮かばない(12)
- ・声優は良くわからない(4)

↑「志摩子＝能登麻美子」もすっかり耳に馴染みましたよね。

栞がまだリアンに居たら、志摩子とスールになったと思いますか？

| | |
|-------|--|
| はい | 2 |
| いいえ | 20 「結局誰も姉を作らなかったんじゃないかな」 「惹かれるだろうけど、聖との間には入れない気がします」 「個人的には見てみたいけど、志摩子さんの性格上無理かな～」 「きっと静の妹になる」 |
| わからない | 2 「成るようになった」「あまりピンと来ません」 |

↑栞・志摩子の姉妹成立には否定的な回答がほとんどでした。

マリみてキャラを描くときに一番気をつける所はどこでしょうか？

| | |
|---------|--|
| 下品にしない | 5 「あくまで清楚に眺しらいをもって(…描こうとしてるんですが)」「下品にならないように(例え鼻血を出していてもw)」「カラーの胸元をゆったりめにしながら、胸の谷間が見えないように」 |
| 可愛く | 5 「めいっばいかわいくるように」 |
| 原作のイメージ | 4 「原作のイメージを壊さないように、かつ自分の持つイメージを表現できるように」「制服を着ていなくてもマリみてっぽく見えるように」 |
| 目 | 3 |
| 髪 | 3 |
| その他 | 5 「適度な現実味と、程々なファンタジーの加減」 「やっぱり表情でしょうか(マリみてキャラだけではないですけど)」 「そのキャラの魅力を引き出す」 「黒くしない」「…ないです(うわ)」 |

↑うっかり忘れがちですが、お嬢さま学校ですからね。

志摩子さんを描くときに一番気をつける点はどこでしょうか？

| | |
|------|--|
| 髪 | 11 「巻き毛の表現」(3) 「ウエーブくあい」 「洋菓子のようなふわふわ感」 「フワフワ感がでるように」 「髪と瞳。マリみてキャラの中では一番気を使います」 |
| 可愛く | 4 「世界で一番かわいくるように」 「可愛く。可愛く。可愛く。」 「可愛い系になるように、大人っぽく凛々しく描かない。」 |
| 目 | 4 「たれ目にしすぎない」 |
| 顔・表情 | 3 「怒った顔はなるべく描かない(描く時は極力ギャグ顔で)」 |
| その他 | 4 ・制服の上からでも分かる胸の双丘 ・弱く・性格 ・自分が納得いくように描けているかどうか(表情、ふわふわの髪も含めて) |

↑志摩子さんといえふわふわ。ふわふわ感の決め手は髪の毛です。

志摩子さんは、受攻どちらだと思いますか？

| | |
|------|---|
| 攻め | 5 |
| 受け | 14 「応用で『誘い受け』と『誘い攻め』」 「明らかに攻なんだけど、受の方が夢がある」 |
| 誘い受け | 3 |
| その他 | 2 「旧は受、新では攻」「どちらもこなせる」 |

↑前の質問と同数。やはり志摩子さんは外せないということですね。

聖・乃梨子以外で、志摩子さんとカップリングしたいキャラは？

| | |
|-------|---|
| 蟹名静 | 8 「むしろそれが正義」 「ある種共犯者のような心で、デートの時みたいに一緒に何かをこっそりさせたい」 |
| 島津由乃 | 7 |
| 久保栞 | 2 |
| 超白薔薇様 | 2 |
| 水野蓉子 | 1 |
| 小笠原祥子 | 1 |
| 福沢祐巳 | 1 |
| 松平瞳子 | 1 |
| 藤堂賢文 | 1 「純粹にお話が見てみたい」 |

↑文通交際中の静さまに加え、由乃さんも大人気。



月ノ原ととと

マリみてで意外と眼鏡が似合いそうなキャラクターは誰？

| | | |
|-------|---|-------------------------------------|
| 藤堂志摩子 | 6 | 「ちまろさんの描く眼鏡志摩子がステキなんですw」 |
| 水野蓉子 | 4 | |
| 佐藤聖 | 2 | 「胡散臭くなるけど…」 |
| 鳥居江利子 | 2 | 「怪しい形状の眼鏡を是非掛けていただきたい」 |
| 支倉令 | 2 | 「でも由乃が似合わないと言っさり切り捨てそう（そのやりとりまで萌え）」 |
| 二条乃梨子 | 2 | |
| 松平瞳子 | 2 | |
| 山口真美 | 2 | |
| その他 | 4 | ・島津由乃 ・有馬菜々 ・内藤笙子 ・柏木優 |
| いない | 1 | |

↑先代薔薇さまも人気です。蓉子さまはスーツにメガネで是非。

志摩子さんの私物になれるなら、何になりたい？(衣服以外)

| | | |
|-----|---|--|
| 食器 | 5 | ・ティーカップ(3) (山百合会用に持参済の。必ずしも毎日使われないという辺りがいい) ・箸(2) |
| 文房具 | 4 | ・筆記用具 ・シャーペン ・生徒手帳 ・日記帳 |
| 鏡 | 3 | ・鏡 ・手鏡(2) (何時でも志摩子さんと向き合えるから) |
| 装身具 | 3 | ・ロザリオ(2) ・髪留め |
| メガネ | 2 | ・メガネ(2) |
| 衣類 | 2 | ・帽子 ・タイ |
| その他 | 5 | ・抱き枕 ・おおきなぬいぐるみ (ぎゅっとされたいw) ・数珠 (本当は草履になって踏まれたい) ・志摩子さんに飼われる柴犬に…… ・銀杏 (すごく嬉しそうに拾ってくれそう) |

↑常に触ってもらえるアイテムに人気集中。

リアンの制服以外で、志摩子さんに似合うコスチュームは？

| | | |
|------|----|--|
| 職業制服 | 10 | ・シスター(3) ・巫女(2) ・メイド(2) (正統派メイド服、ロングスカート+ガーターベルト) ・パニーガール ・女性職員 (割とかわいいことになりそうです) ・キャビンアテンダント(スチュワーデス) |
| 学校関係 | 5 | ・学ラン ・ミニスカートの制服 ・スクール水着 ・白スク水 ・弓道着 |
| 和服 | 4 | ・訪問着(2) ・着物(2) (浴衣もアリですな！) |
| 普段着 | 3 | ・パーカー ・ワンピース ・ブラウス+タイトスカート |
| その他 | 3 | ・うさ耳 ・何を着ても可愛い ・何も身につけないと芸術だと思わんかね？ |

志摩子さんのしまパンツ中心同人誌即売会「しまけつ」が実際に開催されたらサークル参加してみたいですか？

| | | |
|--------|----|---|
| サークル参加 | 9 | |
| 一般参加 | 2 | 「ニコニコしながら買い物」 |
| スタッフ | 1 | 「協力できることはしたいなと」 |
| 参加しない | 10 | 「サークル活動をしていない」(2) 「個人的には志摩子さんは緋パンはかない子だと思っています…」 「参加してみたいけど…個人的には志摩子さんは純白パンツだと」 「…残念！ 私は志摩子さんには白(控えめにかつ上品なレースつき)しか認めないから参加出来ないのです」 |
| その他 | 2 | ・合同サークルで参加 ・合同誌で1枚ぐらいいは描いてみたい |



しなの屋まぐろ

原作中において志摩子の最もえろいシーンは？

『ヴァレンティヌスの贈り物 (前編)』

“びっくりチョコレート”

バレンタインの由来を解説しながらの着替え (2)
聖にチョコを食べられ赤くなる志摩子さん

『ヴァレンティヌスの贈り物 (後編)』

“ファーストデートトライアングル”

聖に抱きついてるシーン

『いとしき歳月 (後編)』 “いと忙しき日日”

ピアノを吹くところ？

『いとしき歳月 (後編)』 “片手だけつないで”

聖と姉妹になるシーン

『チェリーブロッサム』 “BGN”

桜を見上げて無防備に呆けているシーン

『チェリーブロッサム』 “銀杏の中の桜”

バス停で乃梨子の髪についた桜の花びらを取るシーン

『レイニーブルー』 “ロザリオの滴”

ロザリオ受け渡しのシーン

雨に濡れた志摩子さん (挿絵の表情が、何だか)

ロザリオの滴のラスト

乃梨子とスールになったとき

『涼風さつさつ』

あの父親のことを言われて顔を赤らめるシーンが最高

『妹オーディション』

p81 の挿絵

『くもりガラスの向こう側』

お正月に祥子様の家で見せた寝巻きシーンでしょうか

『仮面のアクトレス』

「由乃さんのそういうとこ好き」

「由乃さんのHなところ、好き」

P112 「由乃さんのそう言う所・・・好き」

その他

和服で乃梨子をおでむかえ

乃梨子と泊まりで小旅行 (泊まりでなんぼしょっとね?)

泣いてるシーンはもれなくえろいと思いますが、

むしろそれを視姦してるのりこちゃんとかのがえろい…

えっちな志摩子さんは好きですか？

| | | |
|-----|----|--|
| はい | 21 | 「大好きです！」 (7) 「無意識下に潜むエロティシズムが あふれてるとおもいます」 「えっちな志摩子さんが嫌いな人 なんていません！」 |
| いいえ | 1 | 「イメージに合わないんですね」 |
| その他 | 2 | ・場合によります・恥じらいを忘れない程度なら好き |

↑ 圧倒的な結果に。この合同誌の企画に乗っちゃった皆様ですからね。

マリみてキャラのH絵を描いたことありますか？(この合同誌以外)

| | | |
|----|----|--|
| ある | 14 | 「全力であります」 |
| ない | 9 | 「裸なら描いてます」 (2) 「全く意図してない絵がえろい意味で 受け止められた事はあります」 「寸止めにしているつもりです」 |

↑ 「ある」と答えたのは男性10:女性5。意外と皆さん描いてますね。

志摩子さんのH絵を描いたことありますか？(この合同誌以外)

| | | |
|----|----|---|
| ある | 14 | 「ありすぎます」 「あんどきゃ若かったです。ええ」 |
| ない | 9 | 「裸踊りなら描いてますが」 「水着絵描くときは実は裸バージョンも あります」 「寸止めにしているつもりです」 |

↑ 前の質問と同数。やはり志摩子さんは外せないということですね。

〇わ



おまけ：編集担当も便乗して聞いてみました。

「こんな合同誌があったら参加してみたい！」

■ 企画系

『異色カップリング縛り』の企画本とかがあると面白そうですね。あとリレー漫画とか。

『おばあちゃんと一緒』あえて一世代空けた姉妹（おばあちゃんと孫）の話ばかりの合同誌。

■ 単キャラ

『聖さま合同誌』

『蓉子さま祭』 『蓉子さま合同誌』

『祥子さまオンリー』

『令さま合同本』！

…もの凄く需要なさそうですが…（泣）

『瞳子合同誌』

瞳子ファンなので、もしあれば参加してみたいと思います。

■ サブキャラ

『薔薇の館の住人“以外”のキャラオンリー合同誌』

『新聞部』！！・・・需要なさそう。

■ 世代別

『先代薔薇様合同誌』等もあれば楽しそうです。

■ 薔薇ファミリー（+α）

『白系全般合同誌』（志摩子さん以外も含む）とかどうでしょう。

■ カップリング

『乃梨志摩&志摩乃梨カップリングオンリー合同誌』

（健全でも成人向けでも）

『由祐応援合同誌』

蓉×聖や祥子さま18禁本とか？

■ やっぱり志摩子さん

志摩子本なら、何でも。

ボクはもう志摩子さん一本で。

なかなか面白そうな企画を沢山いただきましたが、全てを実現するのは無理！なので公開しちゃいます。我こそは、と思う方は名乗りを上げてみてはいかが？

志摩子さんのバスの大きさはどのくらいだと思いますか？

| | | | |
|---|----|----------|---------------------|
| A | 1 | [10.0cm] | 「AとBのあいだ」 |
| B | 2 | [12.5cm] | 「個人的にはB80くらいが…」 |
| C | 10 | [15.0cm] | 「それ以上だと垂れる可能性があるし…」 |
| D | 5 | [17.5cm] | 「巨乳でしょう」「かつ美乳」 |
| E | 5 | [20.0cm] | 「Eのつもりで描いています」 |
| F | 1 | [22.5cm] | |

↑「普通派」と「巨乳派」が半々。E以上は意外に女性票が多いです。

同人・絵・漫画以外の趣味をお答えください（複数回答）

- ・ゲーム(5) ・パソコン ・プログラミング
- ・ネット巡回 ・睡眠 ・物書き ・SS書き
- ・読書(4) ・岩波文庫収集 ・自転車(2)
- ・朝の散歩 ・スノーボード ・ドライブ ・旅行
- ・車（洗車、チューニング、ドリフト） ・鉄道
- ・ギター ・音楽鑑賞（プログレッシヴロック）
- ・猟盤（洋楽） ・カラオケ ・買い物 ・料理
- ・茶 ・TRPG ・人狼（“汝は人狼なりや？”）
- ・プラネタリウム鑑賞 ・カメラ ・電子工作
- ・ラジオを聴く事 ・ガンダム研究
- ・ミリタリー（エアガン、WWIIドイツ戦車の資料収集）



賽子

大塚素之 Otsuka Motoyuki (p67, 73)



神谷 Kamiya (p4, 27)



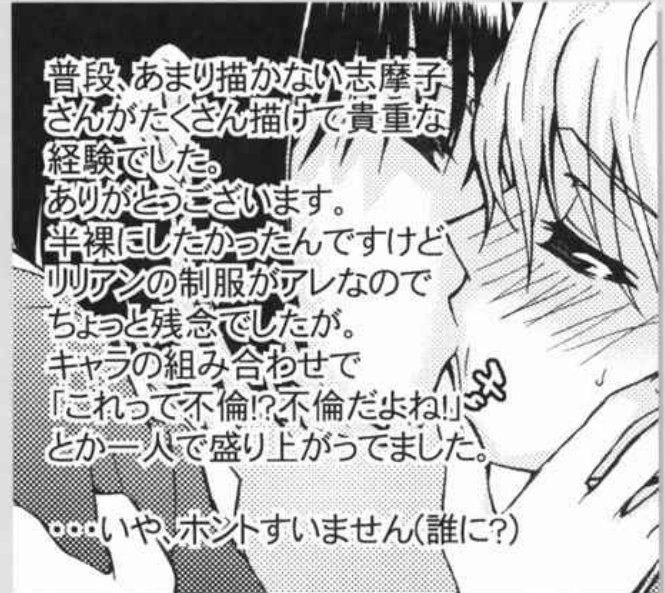
クエン酸 Kuensan (p37, 66)



相原 Aihara (p38)



岩飛ペン太 Iwatobi Penta (p77)



おおかみいぬ Ookami-Inu (p5, 33)



Contributors

ちまる Chimaro (p16)



sinko (p11, 57)

お誘い頂き、ありがとうございましたーv

このような豪華メンバーに参加させて頂き光栄至極でございます。今回は3M (Motto Muchi Muchi) なん千アリ志摩子さんを目指してみました。せっかくの18禁本だというのにゆるくて反省してます。もっとはっちゃんればよかった...お許してくださいマリア様

いろいろお手数かけてくださった碧城さま
お声をかけてくださった miduki-sさま、
本当にありがとうございました。

SECRETLY

<http://www.12.plala.or.jp/sinsin/TOP/>

月ノ原ととと Tsukinohara Tototo (p76)



賽子 Dice (p10, 12, 13)

志摩子さんは天使じゃなく人間の女の子です。そんな生身の志摩子さんの吐息が聞こえそうな本になるのでしょうかね～。

冬弥きよひさ Touya Kiyohisa (p59)



高梁れん Takahashi Ren (p17)



抹茶閣下。 Maccha Kakka (p8, 48)

既出ネタの悪寒がしますが
我が道を通り走りました。
思わずにやりとして
いただければ幸いです。
え、エロ？
おいしいものですよ？
ありがとうございました。

○わ Maruwa (p14, 15)

今回、無理を言って押し掛け参加させて頂き誠にありがとうございました。

多分、他の方々はお尻えっちは描かないだろうな～
と思いつつ描きました。お寺の娘でシスター志摩…
ときたら、純潔を守る為に年頃の火照る体を慰める指
がまさぐるのは…ってごめんなさい。



志摩子さんとは全然
関係ない
43'VW kdf-type82

三月剣 miduki-s (p73)

発起人の片棒を担いだ一人です。
あの方の志摩子さんが見たい！
ああ、この人も！
なんて言ったら、ものすごい方々に
集まっていたことに・・・。
快く執筆いただいた皆様に、
最大限の謝辞を。
ありがとうございました。

三月 剣 (miduki-s)
<http://d.hatena.ne.jp/miduki-s/>

灰猫 Haine (p20)

ごきげんよう。灰猫です。
この度はお誘いいただきまして
ありがとうございました。
久々のマリみてということで
張り切ってはみたのですが、
色々とお迷惑をおかけする
羽目になってしまい、
申し訳ありませんでした。
もし、またの機会があれば、
その時はよろしくお願ひします。

灰猫の個人サークル
『灰猫倶楽部』では、
現在は「プリキュア5」等の
男性向け創作にて
夏冬コミケ等に参加しています。
詳しくは下記HPをご覧くださいませ。

灰猫倶楽部 HP「Petit/Sweets」
URL <http://peticsweets.sakura.ne.jp/>



日和皐 Hiyori Satsuki (p3, 44)



志摩子さんアンソロ発行
おめでとうございます！
お呼びいただけで大変光栄
です！清らかで麗しい志摩子
さんがたっぷり堪能させて頂き
ます。ステキな企画本当に
ありがとうございました！
2007spring* 日和皐

まいたけ Maitake (p53)



意外とエロとお題が
つくと難しいもので…
とりあえず服を
剥いてみました。

何かの間違っている
…たぶん。

本日はお誘い
ありがとう
ございました。

<http://maitake2.blog17.fc2.com/>

ヤマグチタカシ Yamaguchi Takashi (p18, 69)

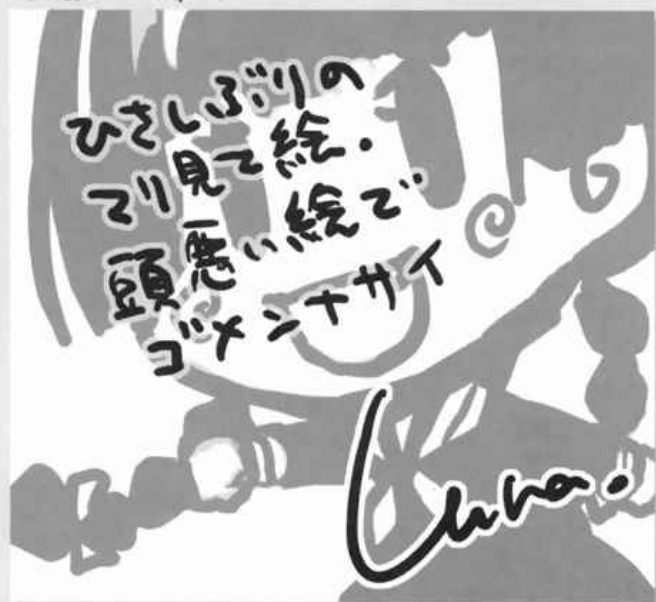


祐馬 Yuuma (p64)

こんにちは、はじめまして祐馬です。
志摩子さんづくしという夢のような
本に参加出来て幸せです！
またこのような企画がある事を期待
しております。
もちろん志摩子さんで。
彼女は最高よ！

みなさんがいつまでも
志摩子さん好きでありますように。

屢那 Luna (p28)



村矢佳久 Muraya Yoshihisa (p7, 29)

この度はお誘いありがとうございました。

思うさま志摩子さんを描けてものそい楽しかったです。

全国の志摩子さんスキーに少しでも楽しんでいただければ幸いです。

それでは。

村矢 佳久

<http://asterisk.hacca.jp/>



やみくろ Yamikuro (p9, 42)

描いて楽しかった箇所
→おしり

本当はもっと志摩子さんをドロドロに、
じゃないドロドロした漫画を描いて
みたかったんですが無理でした。
ていようか締切り破ってすみませんでした。
SATSUGAI させていただきます。



八尋 Yahiro (p1, 21)

想
いは
ひとつ。



RAID SLASH

<http://raid.versus.jp/>

ロサ・ギガンティア 白薔薇さまと呼ばないで

CONTENTS

●巻頭カラー

描き下ろしカラー19作品!

カラーイラスト大特集 [3]

日和皐/神谷/おおかみいぬ/しなの屋まぐろ/村矢佳久/抹茶閣下./やみくろ
賽子/sinko/Oわ/ちまろ/高梁れん/碧城/ヤマグチタカシ/灰猫

イラスト・インデックス [26]

フルカラーコミック

名前を呼んで

八尋[21]



表紙イラスト/八尋

2007/04

●大充実の読みきりまんが&小説

- | | | | |
|------------------|------------|---------------------|-------------|
| 指先 | 村矢佳久[29] | ANGEL SMILE | 大塚素之[67] |
| 志摩子さんのうさみみを観察した話 | おおかみいぬ[33] | 日陰の薔薇 | ヤマグチタカシ[69] |
| さわってかわって。 | 相原[38] | 小説 奥様は生えてない | 三月 剣[73] |
| 甘やかなからだ。 | やみくろ[42] | TO・U・HI と・う・ひ | 岩飛ペン太[77] |
| transparent | 日和 皐[44] | 小説 季節外れの怪談 | 碧城[87] |
| しまぱん | 抹茶閣下.[48] | ●イラスト | |
| Naked rose | まいたけ[53] | 無題 | 神谷[27] |
| 魔法少女志摩子 | | えちい志摩子さんを妄想してみる | 屢那[28] |
| ききいっぱつ!? | 冬弥きよひさ[59] | 無題 | クエン酸[37/66] |
| 時をかける乃梨子 | 祐馬[64] | にゃんこのいる生活 | sinko[57] |
| | | しまけつと adult edition | 月ノ原ととと[76] |

●読みもの

- 志摩子さん大好き!アンケート 105
執筆者コメント 110

●お知らせ

「しまけつとAE」開催のお知らせ 76

藤堂志摩子オンリー合同誌
ロサ・ギガンティア
白薔薇さまと呼ばないで
2007年4月22日初版発行
発行所 志八会 SHIHACHI-KAI 2007
<http://may.x0.com/raptor01/shimax/>

POSTSCRIPT/編集後記

◆合同誌の企画が立ち上がって半年、この本をようやく皆様の元にお届けすることができました。ご協力いただいた皆様にお礼申し上げます◆自分の作品傾向を崩したくない。原作やジャンルの雰囲気合わない。対面で頒布するのは気恥ずかしい……理由は様々ですが、エロチシズムをテーマにした作品って「描くのは楽しいが、公開するのはちょっとね」となりがちです。当初の企画はそんな作品を発表する場としてスタートしました◆もちろん、お祭りは参加者が

沢山集まってこそ楽しいもの。「志摩子さん大好き」なら何でもあり、自由に作品を発表できる合同誌として完成に至りました。一度限りのお祭りですので、お手に取った皆様にも楽しんで頂ければと思います◆サークル「志八会*」はこれにて活動終了です。参加者の皆様、半年のお付き合いありがとうございました。それでは皆様、ごきげんよう。

(編集担当・碧城)

*サークル名の由来は「志摩子さんにハアハアする会」です。もし「次」があったとしても、サークル名は変わると思います。

本誌に掲載した作品に関する諸権利は、各作品の執筆者に帰属します。

本誌掲載のまんが、イラスト、小説等を執筆者に無断で複写・複製・転載・転用することを禁じます。

収録されているまんが・小説はフィクションです。実在の人物・団体などには一切関係ありません。



志八会

相原 岩飛ペン太 おおかみいぬ 大塚素之 神谷 クエン酸
しなの屋まぐろ sinko 賽子 高梁れん ちまろ 月ノ原ととと
冬弥きよひさ 灰猫 日和皐 まいたけ 抹茶閣下。○わ 三月剣
村矢佳久 八尋 ヤマグチタカシ やみくろ 祐馬 屢那 碧城